北支

昭和十四年七月四日第三種郵便物認可 昭和十七年一月二十五日印刷納本
昭和十七年二月一日發行（毎月一回一日發行） 第三十三號

現地編輯

THE NORTH CHINA

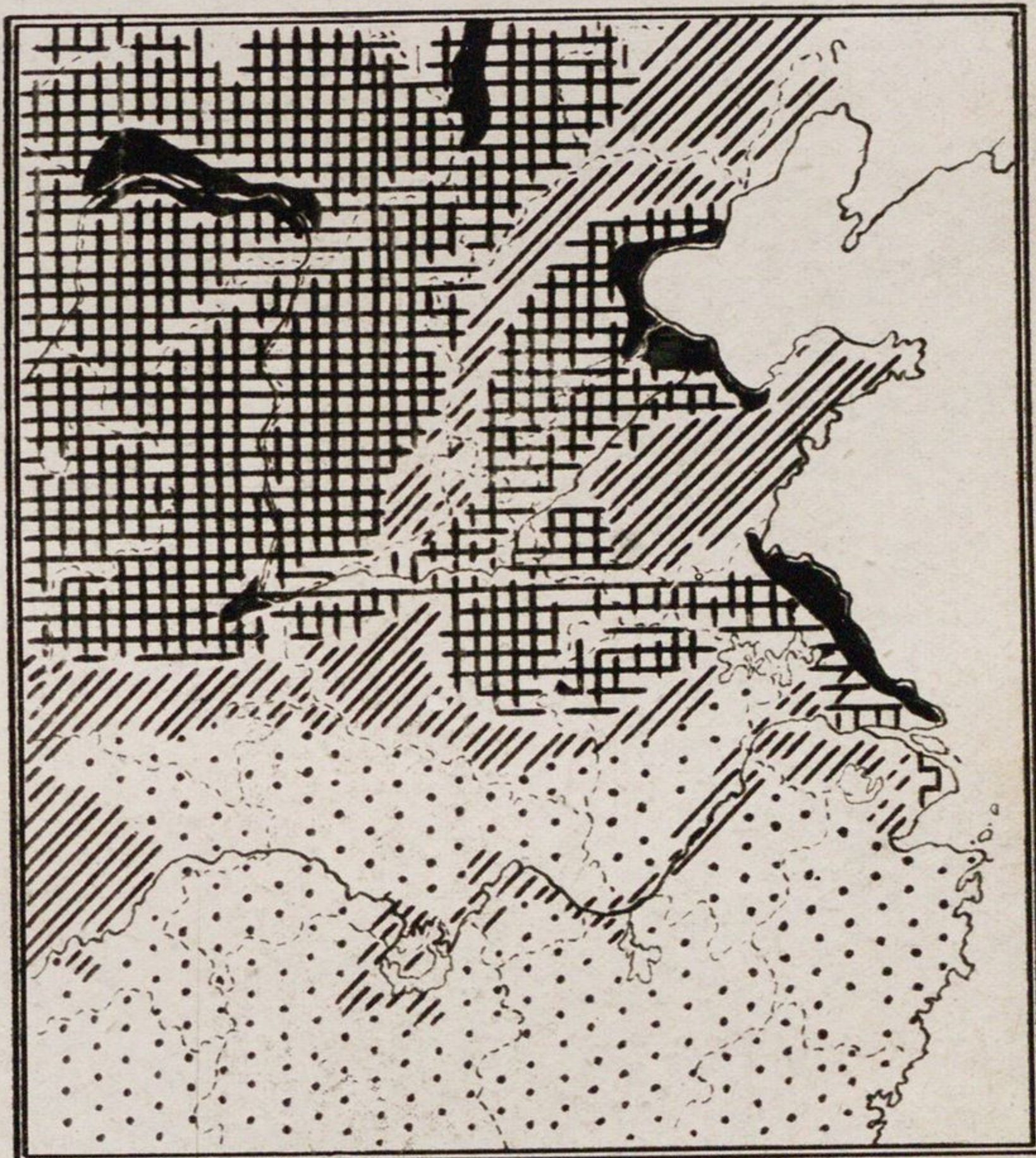
2 4

The Land and the Peoples
of North China (The Soil)

北支の土地と人

土壤

華北の土壤は概してアルカリ性を呈する石灰質土壤である。部分的には幾分の變化はあるにしても殆んど皆淡い黃褐色であり、これこそ黃帝が開いた華北の風物の基調をなす色彩でもある。この淡黃褐色の沖積土は自生する植物として草類しか許さない様な半乾燥氣候の作り上げたものであり、地質學的に來源をいへば所謂黃土である

西部の高原を蔽ふ黃土の表部は大抵未發達淡栗色土又はそれよりも濃い淡栗色土といふ土壤學的性質を示す。水や植物の作用が餘り活潑でなかつた爲に原黃土の保持したアルカリ分は大部分が保有されてゐる。これは黃土が更に河流によつて運ばれて沖積した大平原でも同様である。唯これよりも起伏が大きくて濕度の高い地方では土の色も次第に濃くなつて、黑色土に漸次移行して行く。しかし其處では土壤は豐饒であるにも拘らず、氣溫が低くて作物の栽培を制限し收穫量をも限定してゐるのである

山東の山地部も稍ゝ雨量が多くなるが此處ではアルカリ分を大分洗はれた中性土、即ち餘り肥沃でない褐色土が發達してゐる。ところがその西南方の江蘇北部や安徽北部にかけての低い平原に石灰質の凝塊や磐を含む砂霣土が形成された。これは濕つてゐる時は沼田のやうになるが一旦乾くとベトンのやうに固まつて農耕には不適である。西部の黃土や赤色土の瘠せた山畑でも石灰の結核が多く、これで畑の畝や土手が作られ、なほ餘つたのが道にゴロゴロ捨てられてゐる

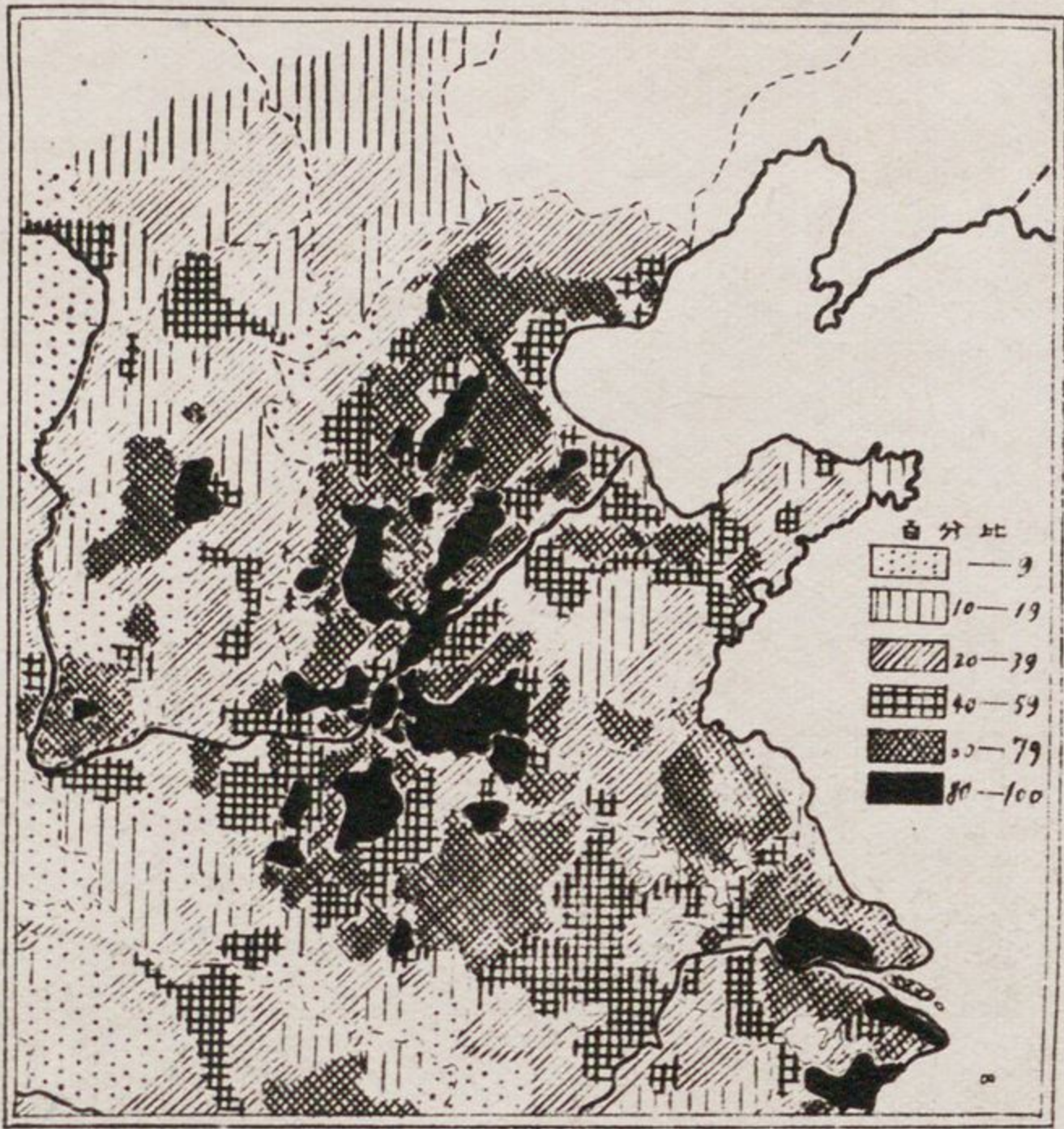
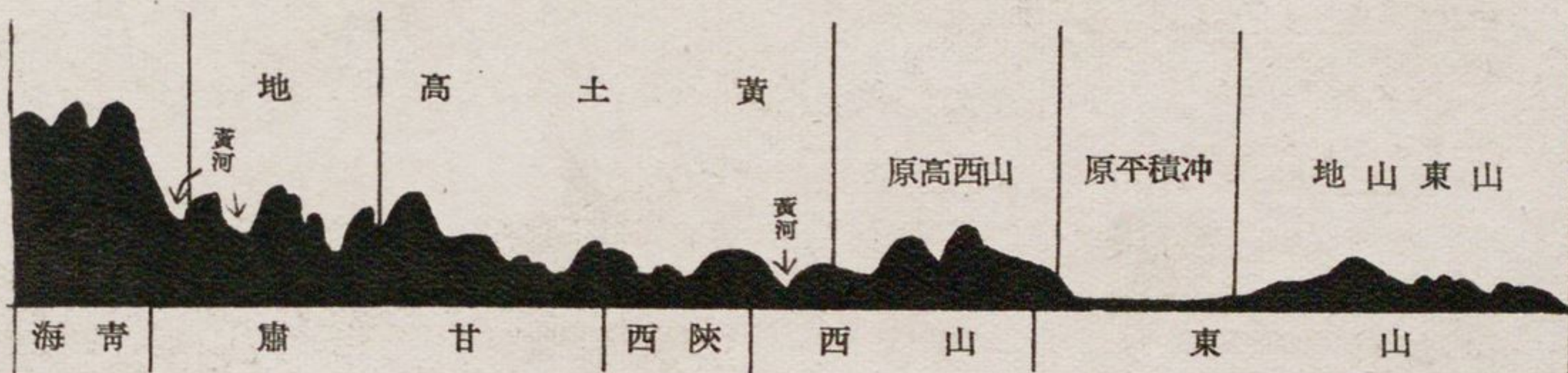
かやうに多量の石灰分を含んでゐることは、つまり華北の土壤が無機的に豐饒であることを意味するのであるが、同時にこれに缺けてゐる有機分と水をどうして補ふかが問題になる。このことを四千年來考へ、そして考へあぐねて來たのが、華北の百姓達であるとも言へる

土壤分布圖

未發育淡栗色土壤に被る西部の高原

土地の總面積に對する耕地の百分比

高粱

北緯三十六度に於ける地勢斷面圖

The Land and the Peoples of North China (mountains & Fields)

北支の土地と人

山と野

大黄河がのたうつて作りあげた東部低地、其處には大黄河と海河系其他の水系が蛇行する。農民はこれらの河川から龍骨車で、時には柳籠で水をくみ上げて畑に灌ぐ。ただ山麓の扇狀地帯や傾斜の激しい河川の近くには砂質土の堆積がみられ、時には砂丘さへも發達してゐる。さうかと思ふとこの砂の堆積の間に挾まれる窪地には廣い沼澤地が出來てゐることもある。前者では楊柳や檉(ぎよりう)を植ゑたり果樹を植ゑる。そして農民は流砂が停つたら直ぐ耕さうと待ち構へてゐるのだ

西部の高地はその中に幾つもの盆地を懷き、この盆地こそ古代農業文化の搖籃地であつたのだ。そして今なほ重要な農業地帯を作つてゐる。其處では粟、罌粟、麥などが作られる。更に高い山地の段々畑に上るか長城を北に越えると作物の種類は一變し、麥は春播きとなり、燕麥、蕎麥、馬鈴薯が重な作物になつてくる。平地の農民は水と鬪ふ苦痛を持つが山地の者は低溫と鬪ひ、更に土地の激しい傾斜に挑まねばならぬ。どんな險しい山膚でも少しの黄土のある限り耕し、殘つた山野は羊の遊牧地として利用してゐる

こんな處でも、天の惠みはある。低溫乍ら多濕な氣候は凶作の襲來を幾分でも少くしてくれてゐる

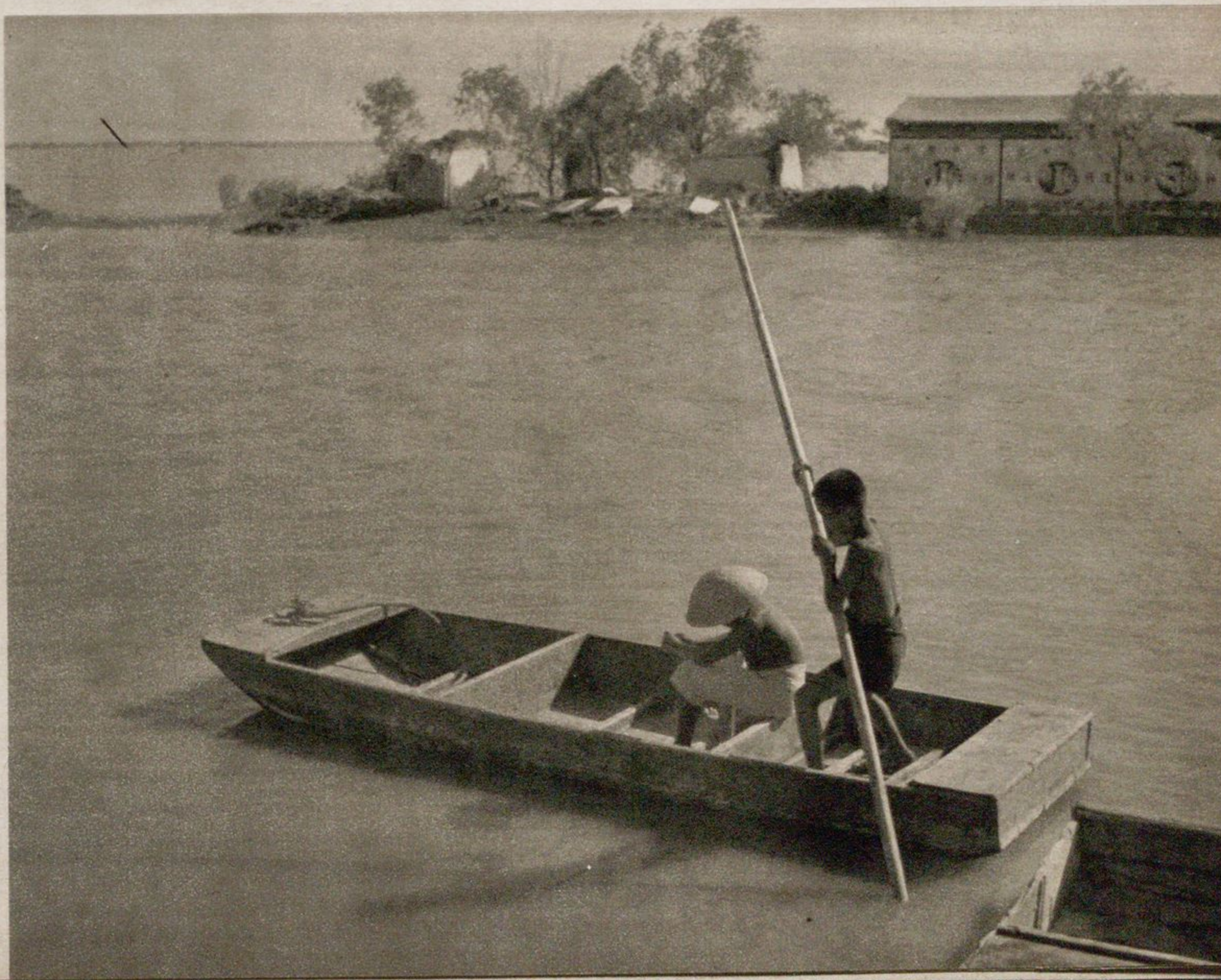
高原地帯の農家及び耕作景観

傾斜地帯に於ける高粱の収穫

ケシ畠

北支の土地と人

泥水生活幾月か、ひからびた漢民族の皮と骨が退水を待つて再び沈泥の上に働きだす

水害時に於ては平野は一望無限の海原になる

The Land and
the Peoples of
North China
(Heavenly Wrath)

氣候と天災

北支の冬の風はかなり寒いが、滿洲に比べると樂である。氣溫はほぼ內地の東北地方に匹敵しよう。川や湖が凍結し初めるのは十一月末か十二月上旬、翌年の二月下旬か三月上旬になれば氷が融け初め春の息吹が聞える。だからスケートを愉めるのも極く短い期間、シューヴァ（毛皮の外套）が要るほど寒いのは山西や蒙疆の高地だけである。滿洲を關外となし、關內こそ文化地域であるとする北支民衆の觀念は、この氣候條件からみても頷けるところであらう。しかし三寒四溫型の氣溫の變化は馴れるまでは注意が肝要である

夏の暑さは樹木の尠い大地の反射熱も手傳つて相當なもの、殊に南部平原では酷烈である。都市では屋根の上にも窓の前にも天棚（アンペラ張り）が設けられる。これで直射熱を遮つた日蔭の涼しさはまた格別である

雨は尠いがその殆んどが夏期に集中する。平原で四、五百粍、高地では四、五百粍から二百粍位、一部山麓地帶で七、八百粍といつた所もあるが、この雨量は、漸く農耕を許す程度でしかない。しかもこの雨量は年によつて極めて大幅に變化し、旱魃と洪水を生ぜしめるのである

雨の神、龍王に涙なく、流民は一家を擧げて故地を去らねばならぬ

北支の土地と人

植物

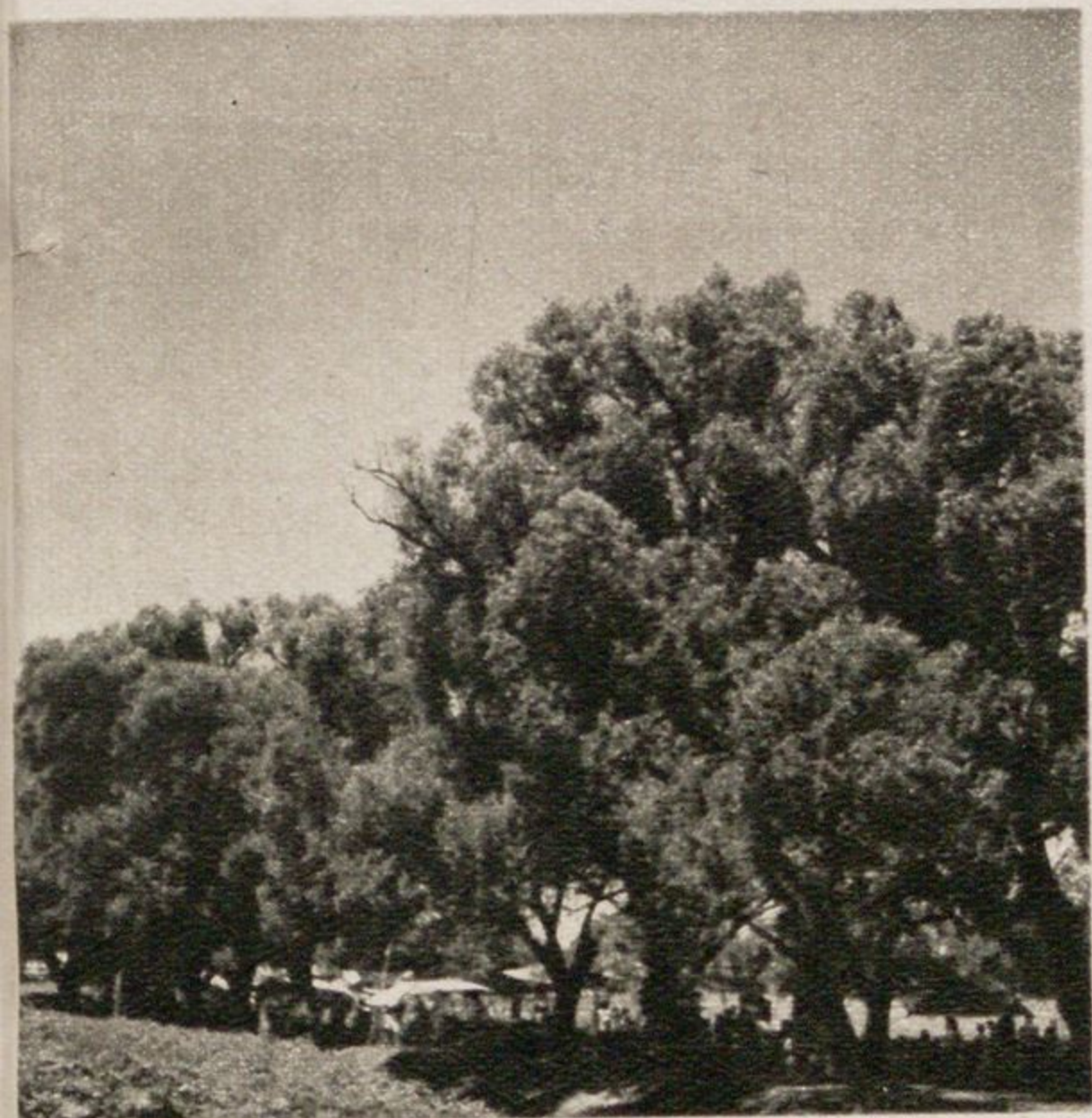
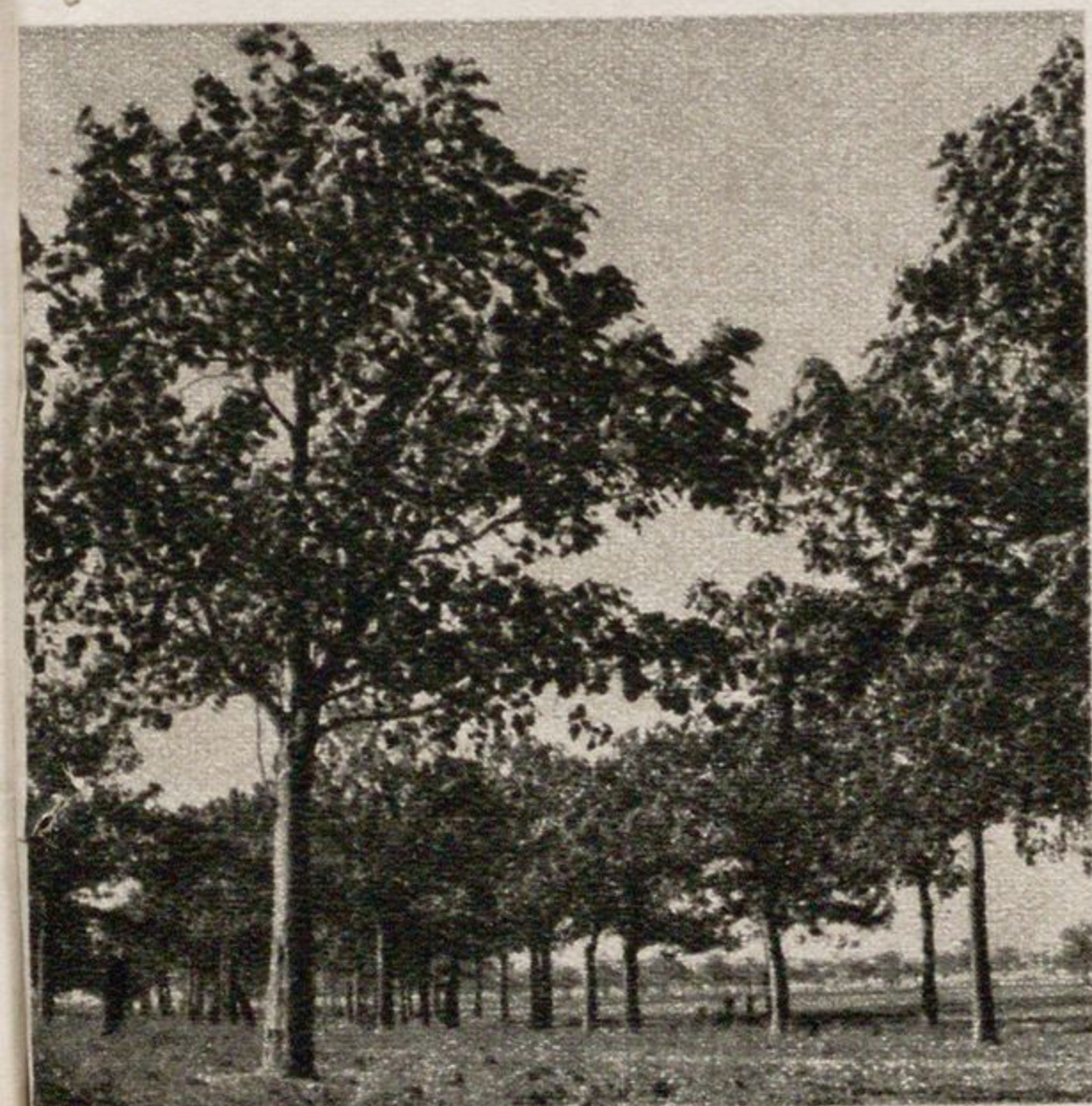
平原地方の樹木はすでに殆ど伐採し盡されてゐるが、わづかに點々と楊柳、槐、楡等の木立が殘つてゐるし、水邊には蘆が繁つてゐる。この木立は夏に涼しい憩ひ場となる許りでなく、農民の家、家具、農具、舟車など、すべてこれらを材料にして造られる。又一部のアルカリ地帶や海濱地帶には鹽地草原が殘つて居り、磯松、青蒿、藜、地膚等が、蝗群の繁殖する叢地を作つてゐる

山地に入れば蒸發の激しくない北向斜面の若干の森林を見ることがある。海拔三百米位迄の山麓地帶や更に海拔の大きい盆地底では槲や樺、又は之に槭、楡等を混へた落葉樹林があり、更に高くなれば松や唐檜等の針葉樹林がはじまる。五台、無靈等の高山では、紫杉、落葉松等となり、之を越えると野生の牡丹、白頭翁、罌粟等が高山草地に咲き亂れてゐるのである。だが、丘陵の斜面とか盆地や平原の砂地、鹹地なぞに樫だけが自生してゐたり或ひは棗其他の果樹とか桐の人工林を見出したりするのは實に趣があつて面白い珍しいものでは大行山地の白松、皀角、

栝——俗稱白松

柳——河岸、道路、畦に沿うて平原に最も多し

沙漠地帶の叢生（オルドスにて）

桐——開封附近の荒地を利用して栽培す

The Land and the Peoples of North China (Plants)

冀東の野生櫻桃、其他各地の野生果樹側柏(コノテカシハ)等がある
更に蒙古高原のアルプ型草原を越えて沙漠に近づくとタチハリガネヒバ、フトネアヤメ、駱駝萓、沙漠蒿(サバクヨモギ)等の叢生が特異な景觀を構成し又其處には名高いウラル甘草が自生してゐる

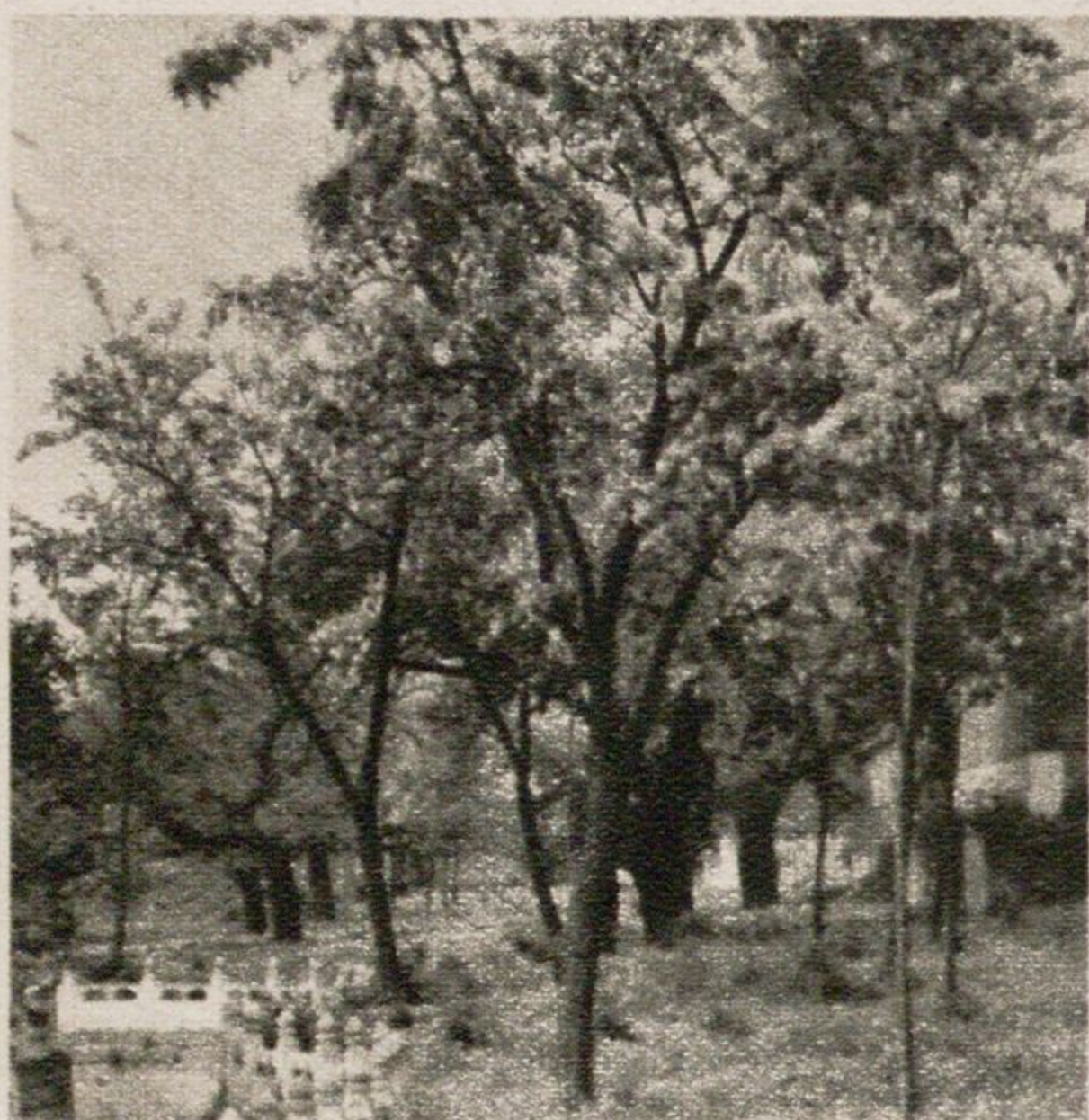
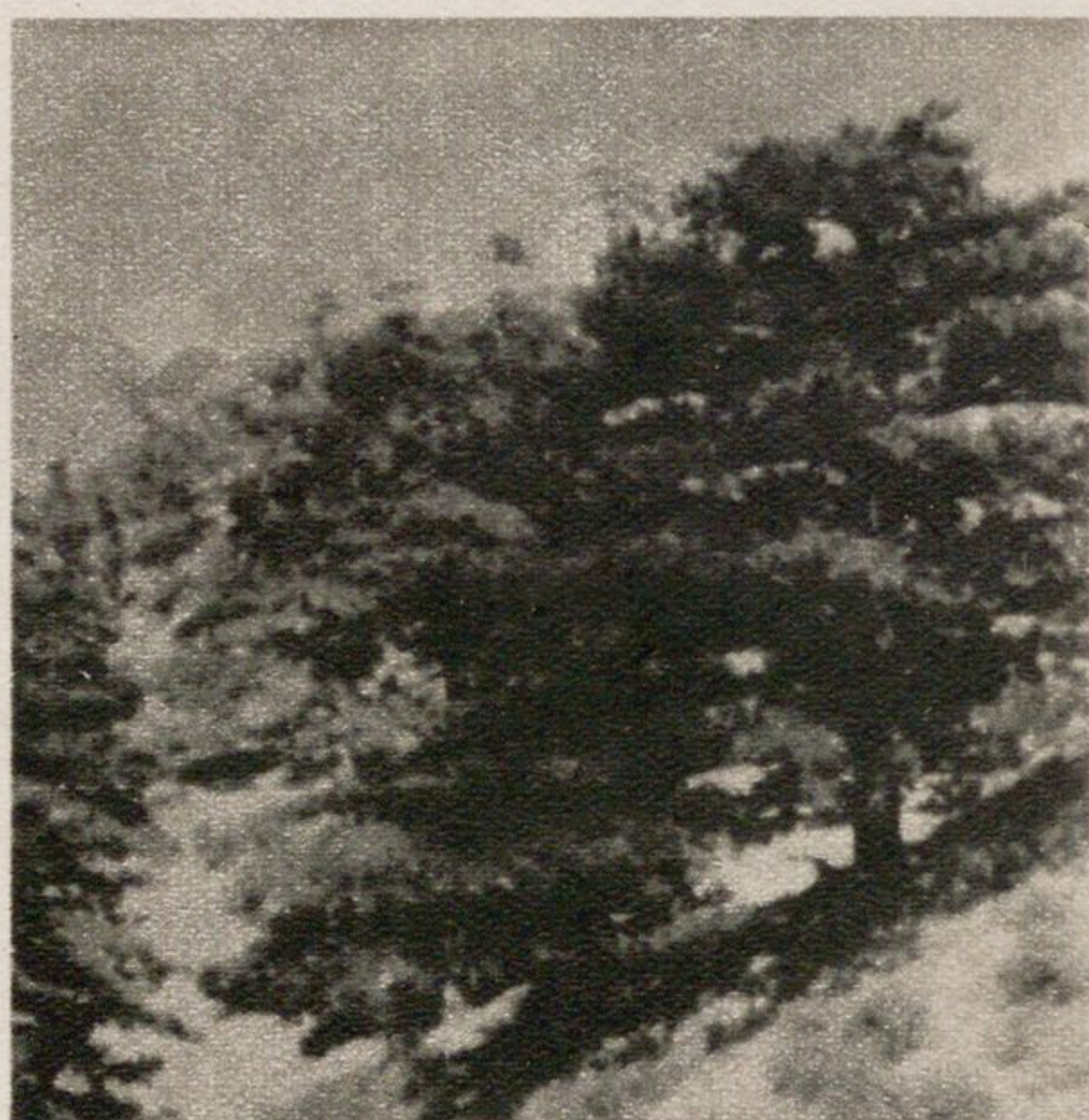
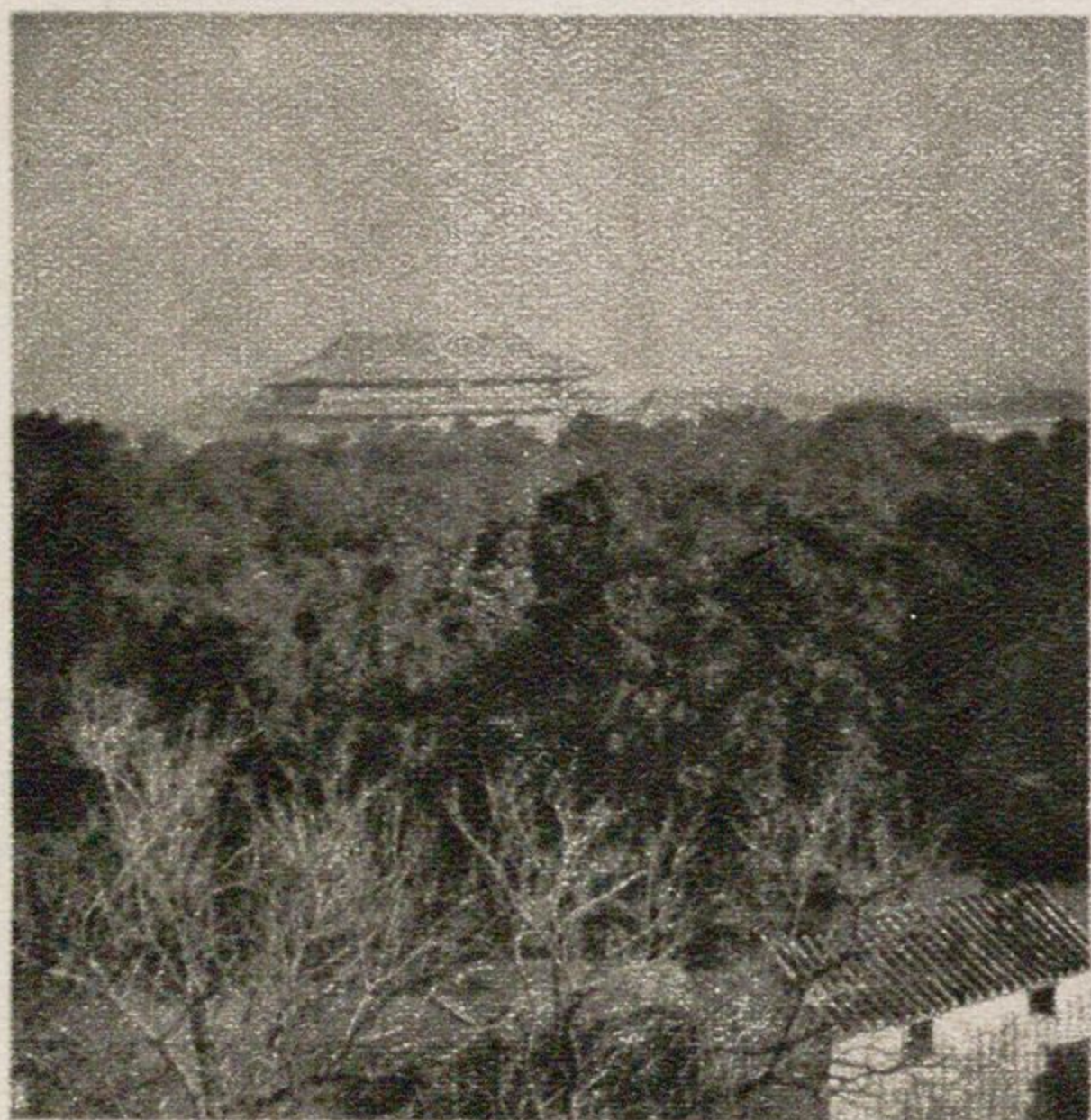
0. 汎濫原林/栽培地、 1. 乾燥地植物地帶、 2. 矮草原、 3. 長草原、 4. 沙漠、 5 耐塩性植物地帶、 6、雜草、灌木、喬木、高山植物地帶 7.9. 灌莨、針葉樹林地帶、 10、樹木生長迅速ナル地方 11. 濶葉樹林地帶、 12 石南類、 13、植物雜多ナリ

自然植物分布圖

アカシヤ（胡藤）

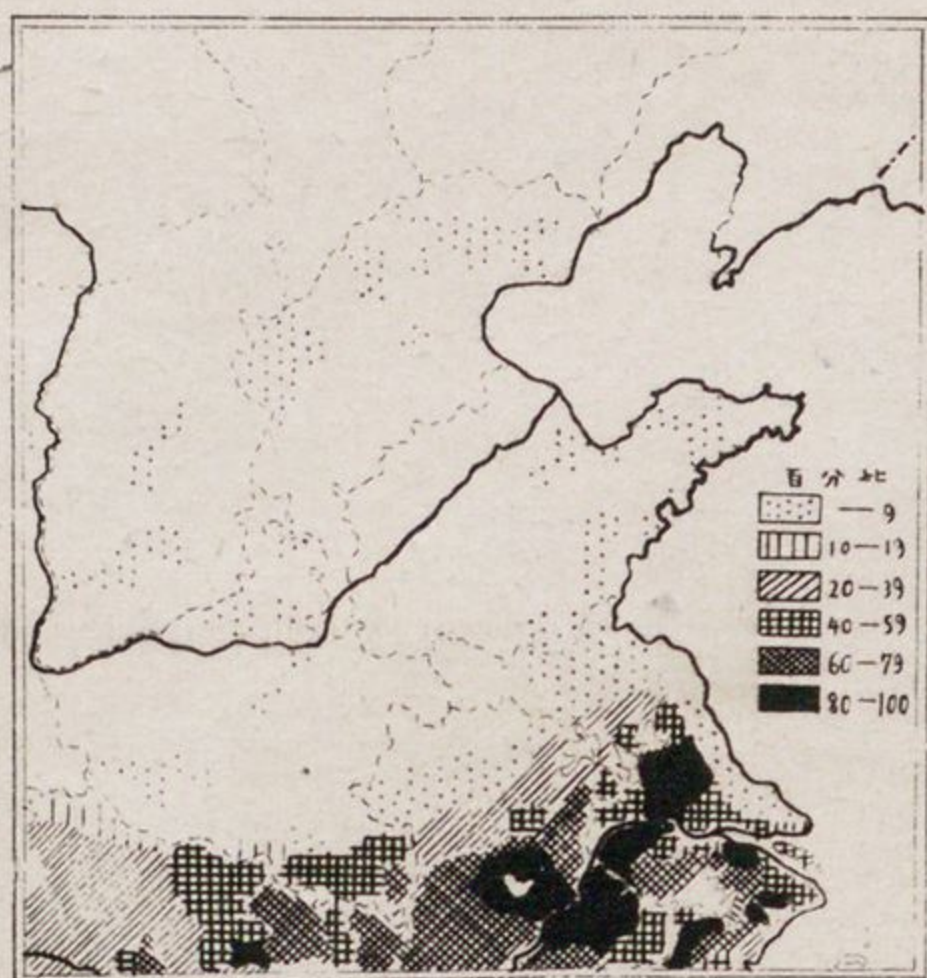
陰山山脈に於ける馬尾松の天然林

柏（コノテガシワ）

棗樹

北支の土地と人

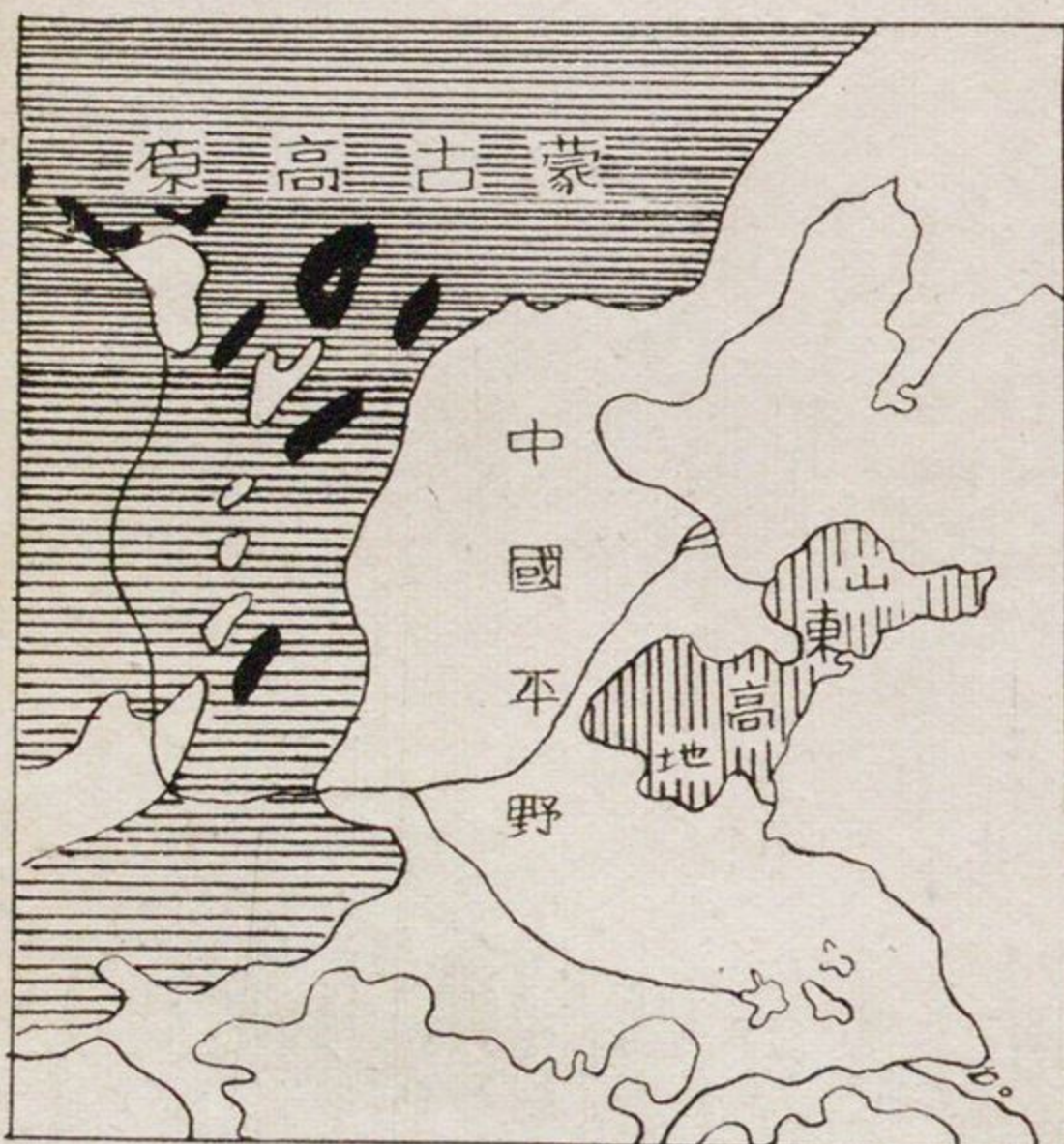
高原と平野

華北の農業に於て牧畜は極めて重要な部分を占めてゐる。だが長城から陰山の背後にかけては更に重要性をもち、淡栗色土壤を越えた草原では未だ農耕が行はれてゐず廣漠たる平原と遙かに連る丘陵のすべてが綠の草野である。候鳥の訪れる沼もあり、肥えた羊も可愛い若駒も、彼等の主たる蒙古民族と共に高原の大氣を滿喫してゐる

風土は生產力を甚だしく制限する。水と草との條件を改良して行くにもかなり難しい問題がある。氣候の年毎による激しい變化、それは洪水となり旱魃となつて民衆の大量移動までも必要と

水稲地區圖

日本の指導による水稲の播種、低温でない地域では移植も可能である

遊牧のみに生きる內陸水系の乾燥アジア——內蒙草原

The Land and the Peoples of North China (Highlands & Lowlands)

させる。更に古い傳統の文化と新しく移入されようとしてゐる文化との間には摩擦を生じ易い。そして之を自ら處理しようにも彼等は餘りにも若く且つ貧しいのである

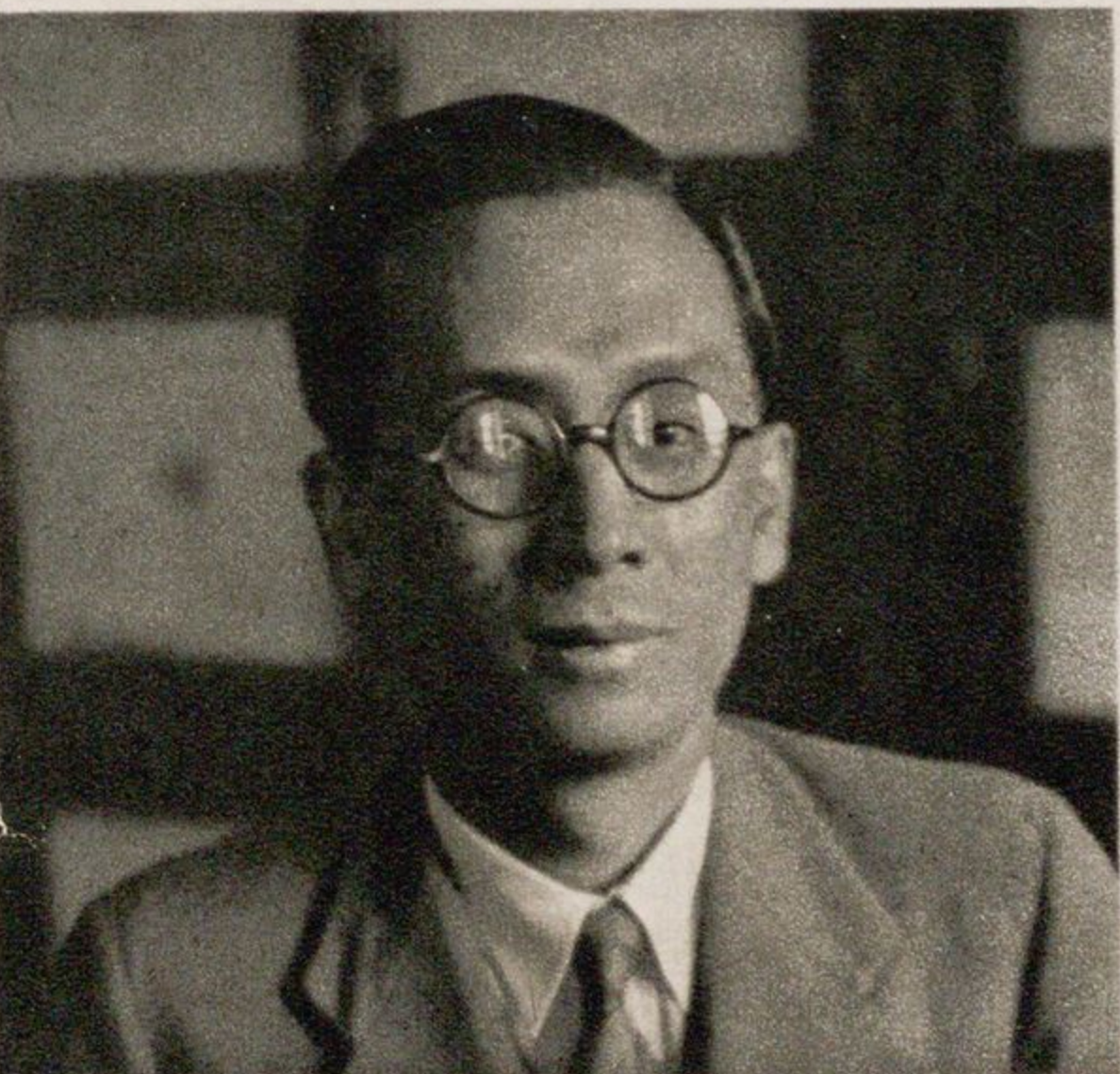
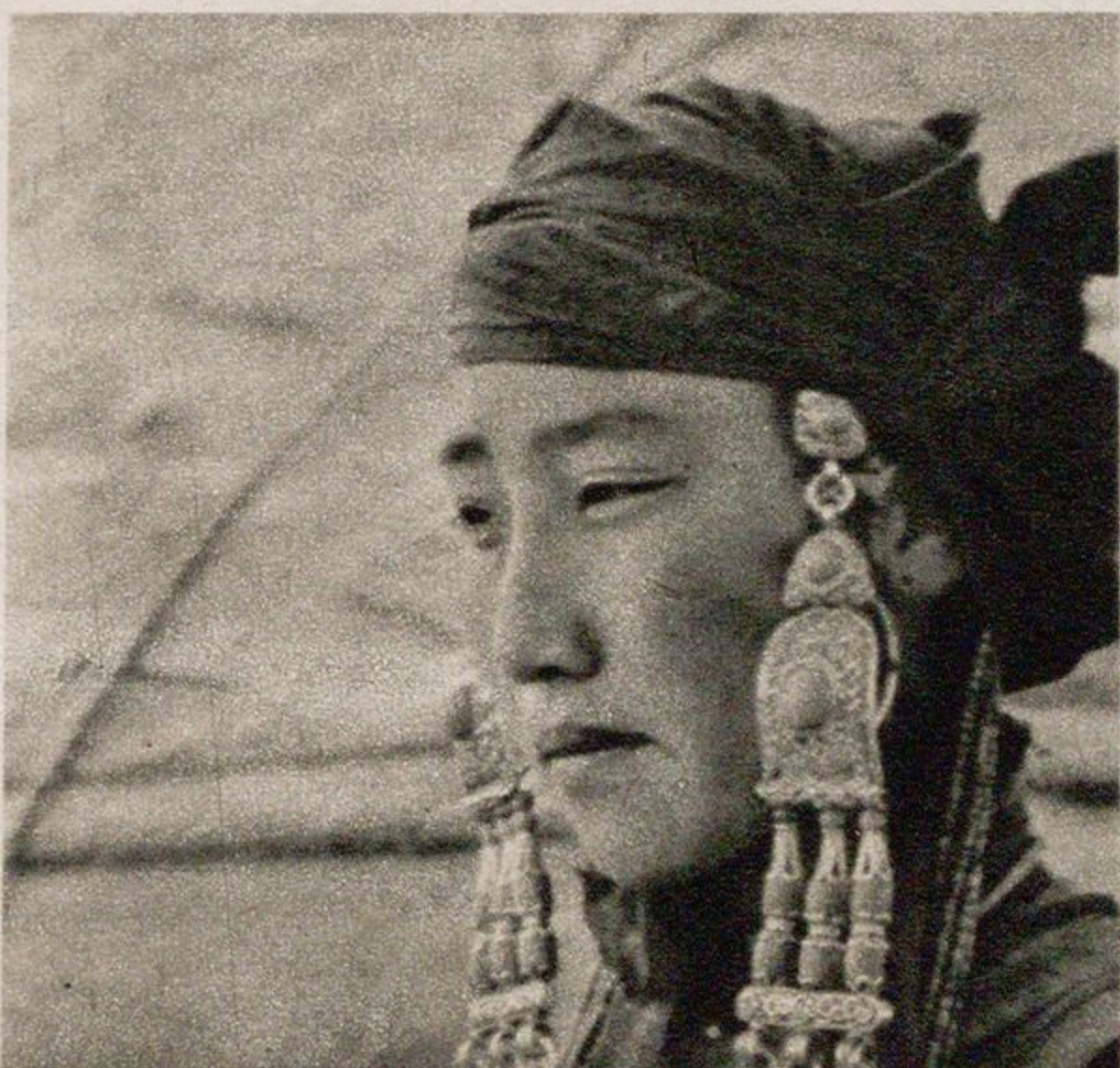
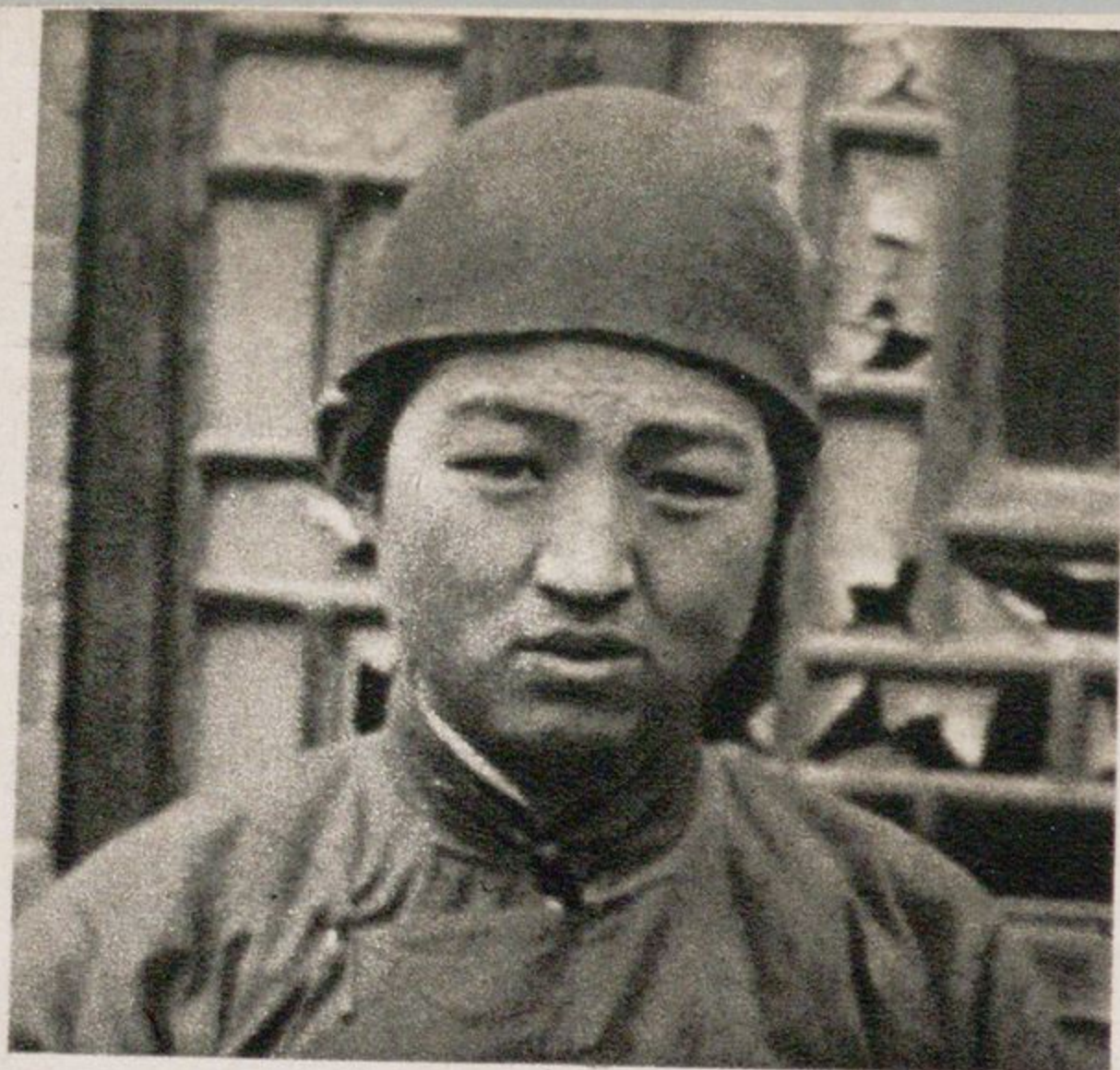
北支はその乾燥氣候のために全般的に畑作を基調とする農業地域である。しかし耕地が低く適當な水源さへあれば土壤の肥沃さと夏の高溫によつて水田稻作も可能である。由來、食糧不足、過剩人口に惱む華北農民である。畑作より集約的で食糧としての價値も大きい水田耕作に轉作し得る事になれば彼等には甚だ有利であるのだが、この水田適地は陰山以南の河谷、盆地、低原に多い。將來に委ねられた課題であらう

主要地勢區域圖

北支の土地と人

民族

歴代文化の中心であり首都のあつた華北は自然に四邊諸民族との交渉も激しかつた。來住した異民族は漢民族の血を混じて同化して行つたが漢民族自らもその蓄妾制から他民族と混血し純血

The Land and the Peoples of North China (The People)

漢民族——北京の女學生（河北人の特徴を持つてゐる）

漢民族——商人

蒙古族の男

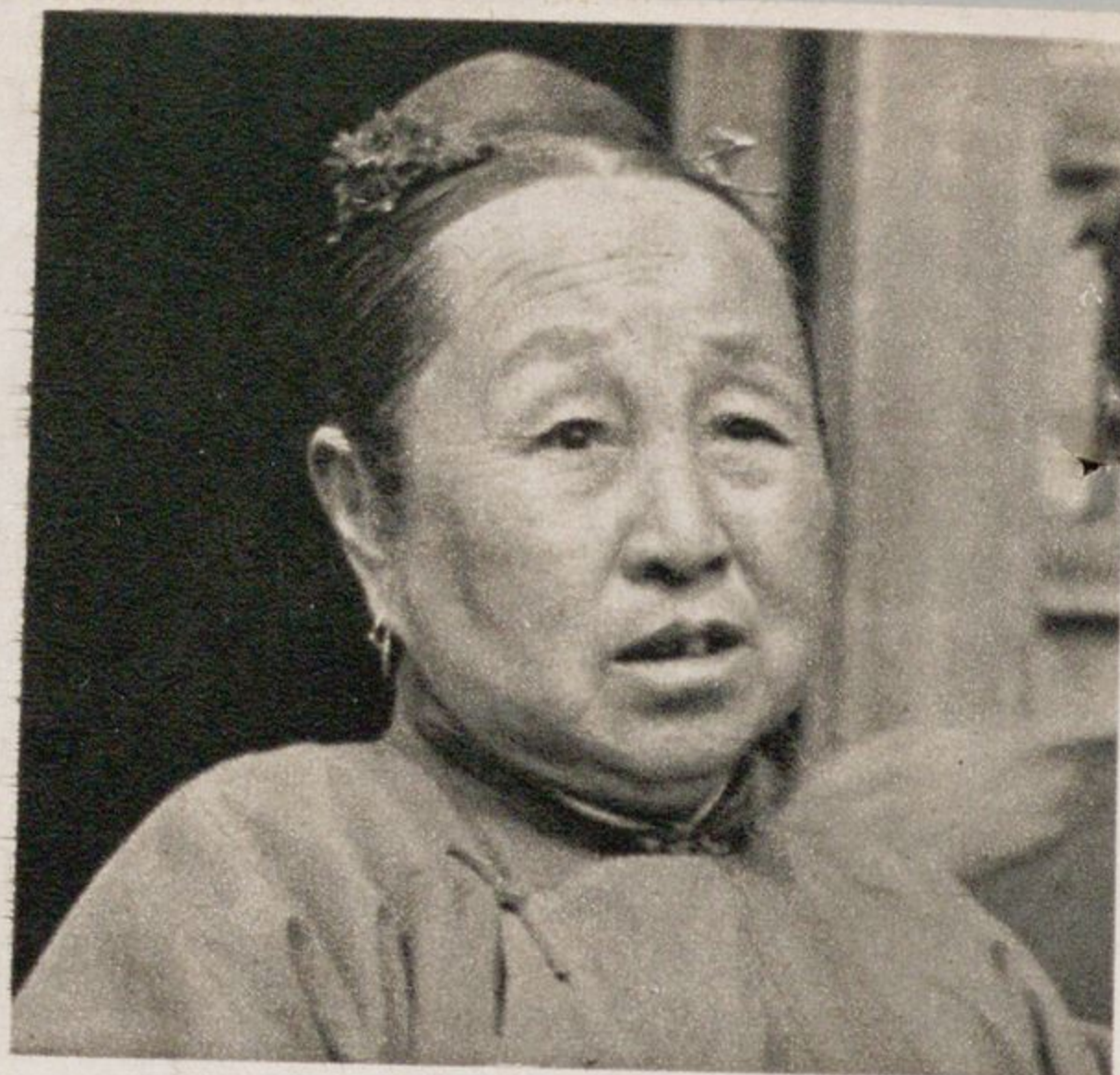
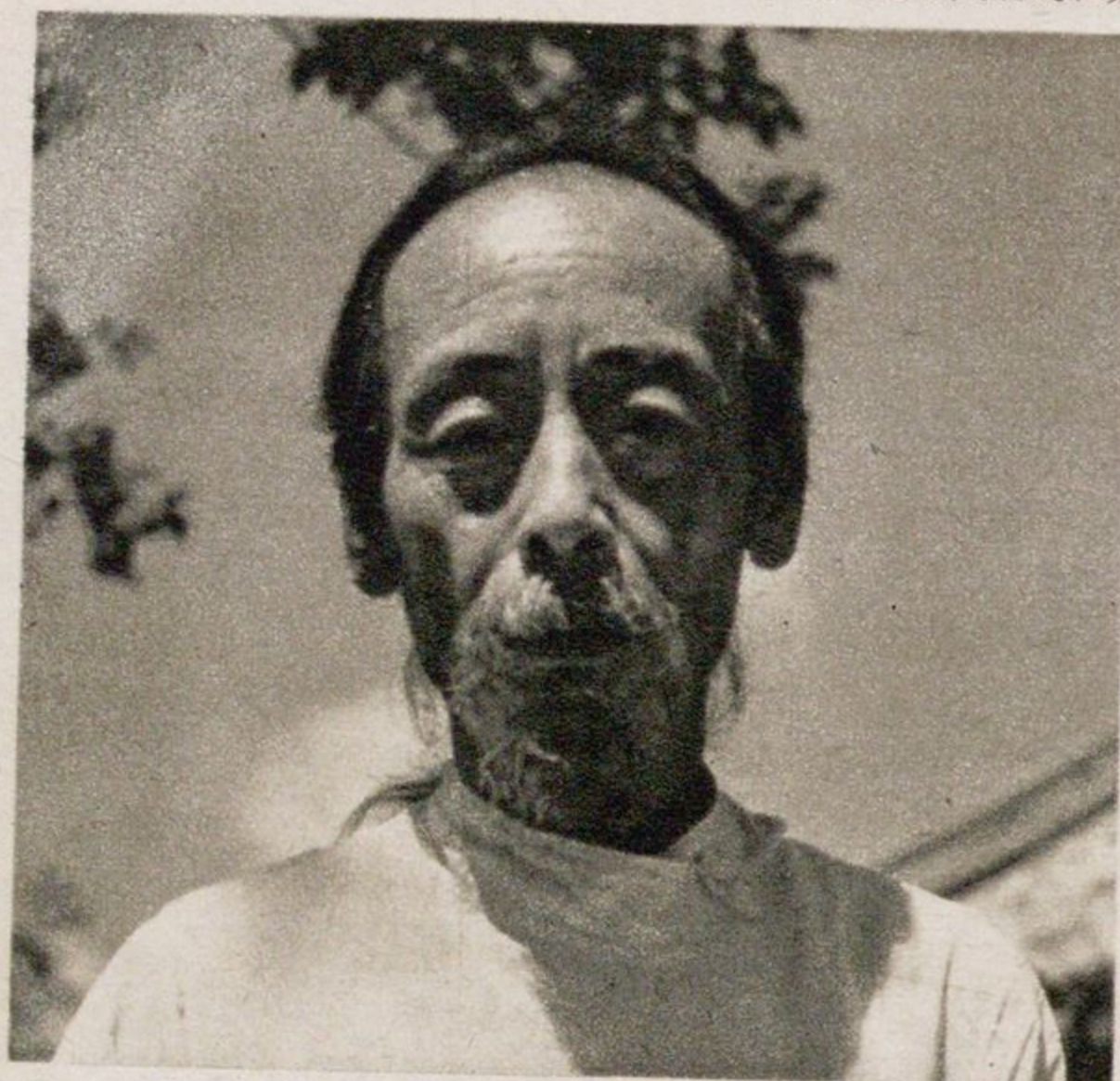
漢民族——知識階級

蒙古族の娘

開封猶太教徒――長い間の混血で猶太人の特色は可なりに失つたが、中には鼻梁にも窺はれるものがある

滿洲旗人の太々――蒙古・ツングース・朝鮮へ連るウラルアルタイ語系一連の俤が見られる

康熙年間來住以來漢民族と混血したロシア人の後裔

回教徒――はつきり西域人の俤が表はれてゐる

を保ち得なかつた。從つて華北と言つても各地域毎に容貌や體質に差異がある。然し華北の漢民族は混血した他民族要素の差異と風土や生活様式の影響もあつて、中南支の漢民族とは大體見分けがつく。長い大きい眼、長い顔、坐高も高い。黄褐の膚は強い日射しと黄塵のために幾分荒んではゐるが、有閑人には色白く、白磁や蠟石のやうな膚をもつものもゐる。丸顔で眼も丸く膚は櫻色といつた華南人に比べると同じ漢民族といひ乍ら異つた感じをうけるのである。華北で血色のいい可愛いい子女を見たら華南籍の人と思つていい。動作はのんびりとしてそのくせ心理は複雜、社交は馬鹿氣たほど大事にする點など華南人には見られぬことである。また上層階級と下層階級とでは物の見方考へ方などに極端な相違を示すことがある

華北に殘つてゐる滿洲族や蒙古族は主に旗人の後裔である。彼等は漢民族に比べてお人好しといつた感じはあるが漢民族との長い雜居生活から同様に到底日本人など太刀打ちできぬほど狡猾になつてゐる。回教徒でも西方との隊商貿易に携はる者の中にはトルコ族の風貌があり、開封在住の猶太人や北京東北隅のアルバジンの舊教徒なども今日なほ碧眼紅毛の名殘をとどめてゐる

北支の土地と人

The Land and the Peoples of North China (Places of Abode)

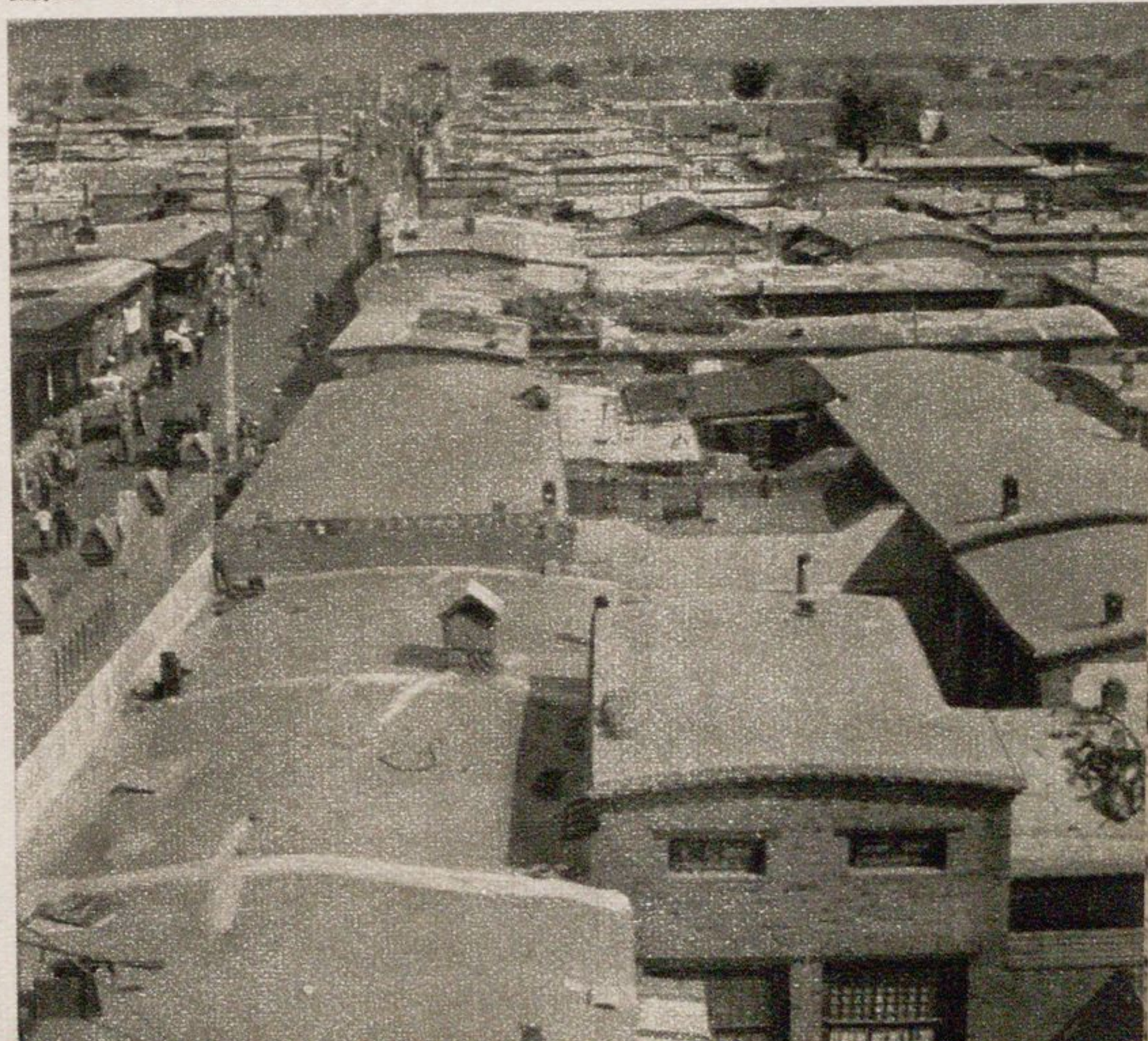
北京の屋根の一種——外棟のあるとないもの

住居

穴居生活から土石利用の住居を經て來た西域からの流れと、多濕多雨で草や竹木を資材として住居を營む南方の季節風帶からの流れが華北の住居に窺はれるのは面白い。前者は重たく厚い線を持ち屋根は平屋根から兩棟の間に幾つかの過程が示される。即ち平屋は喇嘛廟に見られ、一方により傾斜して庇が側壁の上に懸る片棟の屋根が蒙疆山西北部などに多く、これと違つて客車の屋蓋を思はせる平房子は河北省の北部に多い。殊に山海關地方では背後の

比較的雨の多い山東西南部に見る急

列車住宅ともいへさうな平房子の屋根、白い線は石灰で補修したもの——山海關

ラツプの三角錐や、インディアンの圓錐木柱住居と同じ流れの上部と後に高みな附けた側壁の合成型式——ゲル

山地に得られる石灰の混用に依つて多雨な夏季も緩傾斜で耐へられ、棟木は節略される。兩棟の屋根にも外棟を裝はぬのが多く、棟飾のあるのは上等の瓦葺である。瓦も同形の半圓筒が上下喰違はされたもので密に重なり厚みが出る。又北支の窓にはアーチが見られ、炕の使用に伴ひ特異な煙突が用意される。間取は獨房對房四合兒の三種になる。南から來た要素は山東の急な草屋根や山西や河南西部の二階屋や斗栱の激しさ、屋根の反りなど重要な木材部に見られ、輕く薄い感じに傾く。以上に對して蒙古の包グルは圓形の平面形から見ても特殊なもので、遊牧民族の持つ錐狀木柱テントから來た傘狀部に他の文化から取り入れた側壁の矢來組み部を加へたもので、その材料の木材條件と工作條件からしても自家生產は許されず漢族から買ひ込まれねばならぬ

穴居、その窓、アーチの窓の一つの右上の小突出は煙突である。これは上の畠に導かれるところもあり、土壁の上部に穿けられるところもある

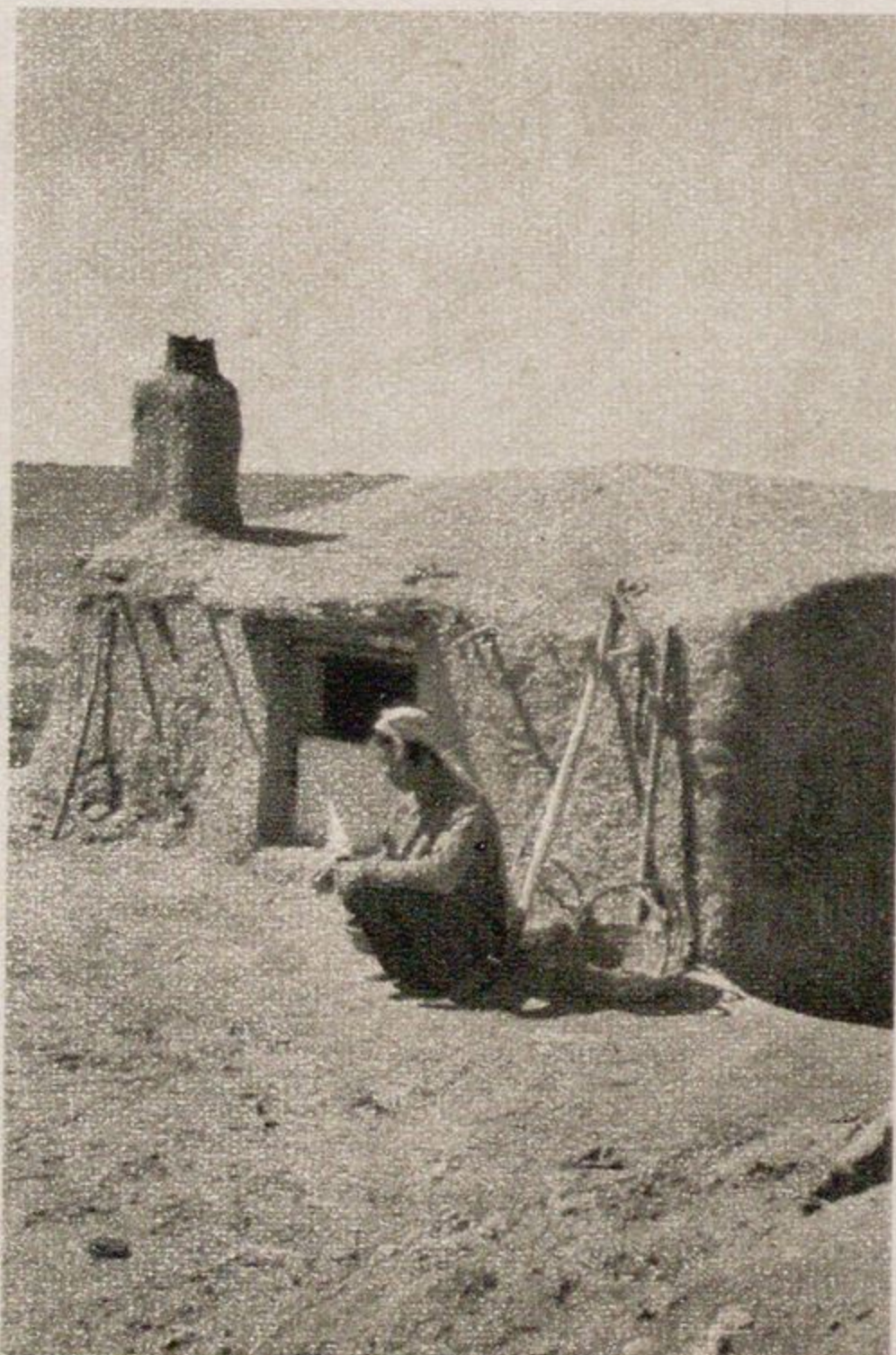
アルカリ地帶の泥房子——强度のアルカリ分は土壁な凝固させる

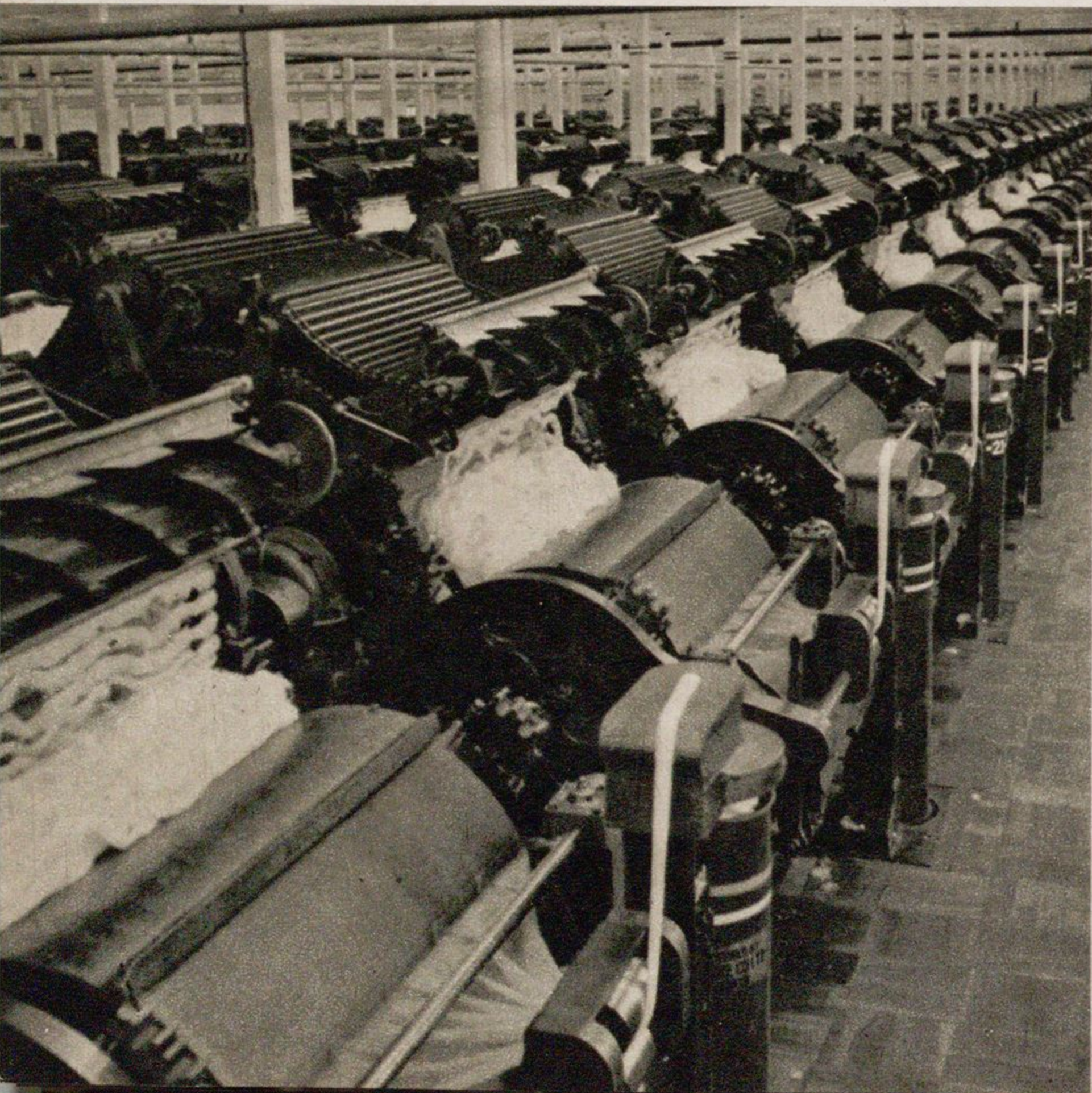
な草屋根の民家

f North
ce)

田舎の町はづれに開かれた朝市

北京の盛り場大柵欄

The Land and the Peoples
China (Industry & Comme

北支の土地と人

商業と工業

農と牧と零細な手工業との上に發達した古代支那の商業は中世から中南支の開發に伴ひ愈〻榮えて來た。そして廟會と市とは相互に作用して各地に發生し市の立つ處には廟が建てられ、廟會の開かれる處には市ができていつたのである。小さい町でも、或はその出外れに或はその裏手に定期の市が立つ。城郭都市ではその特殊事情に支配されて大抵門外に市が設けられる。そしてその市が發展すれば其處に店舗が建ち遂ひには、之に圍壁が施されて關城とよぶ樣になる。北京の外城もその一型式である。支那の經濟分野が農業と商業とを基調とする樣に、政治、軍事的な意義を持つた都市は卽ち商業上の機能を持つものの大部分であるから、支那の聚落——都市の經濟的性格も農村と商都とが重要な部門を占める。漁業にのみ頼る漁村は限られた數であり、手工業は概ね副業であつた。併し需要——市場の擴大は專業の手工業を促し各種の細工から絹綿の紡績が都市は勿論農業地帶に榮えた

併し新工業は先づ紡績部門を先導として北支にも建設が始まり、殊に事變前後より日本の協力に依つて拍車が加へられた。そして此の新工業の新設は必然交通の近代化、商業貿易の新機構化を强要して來る

家庭工業——河南省

近代工業——紡績

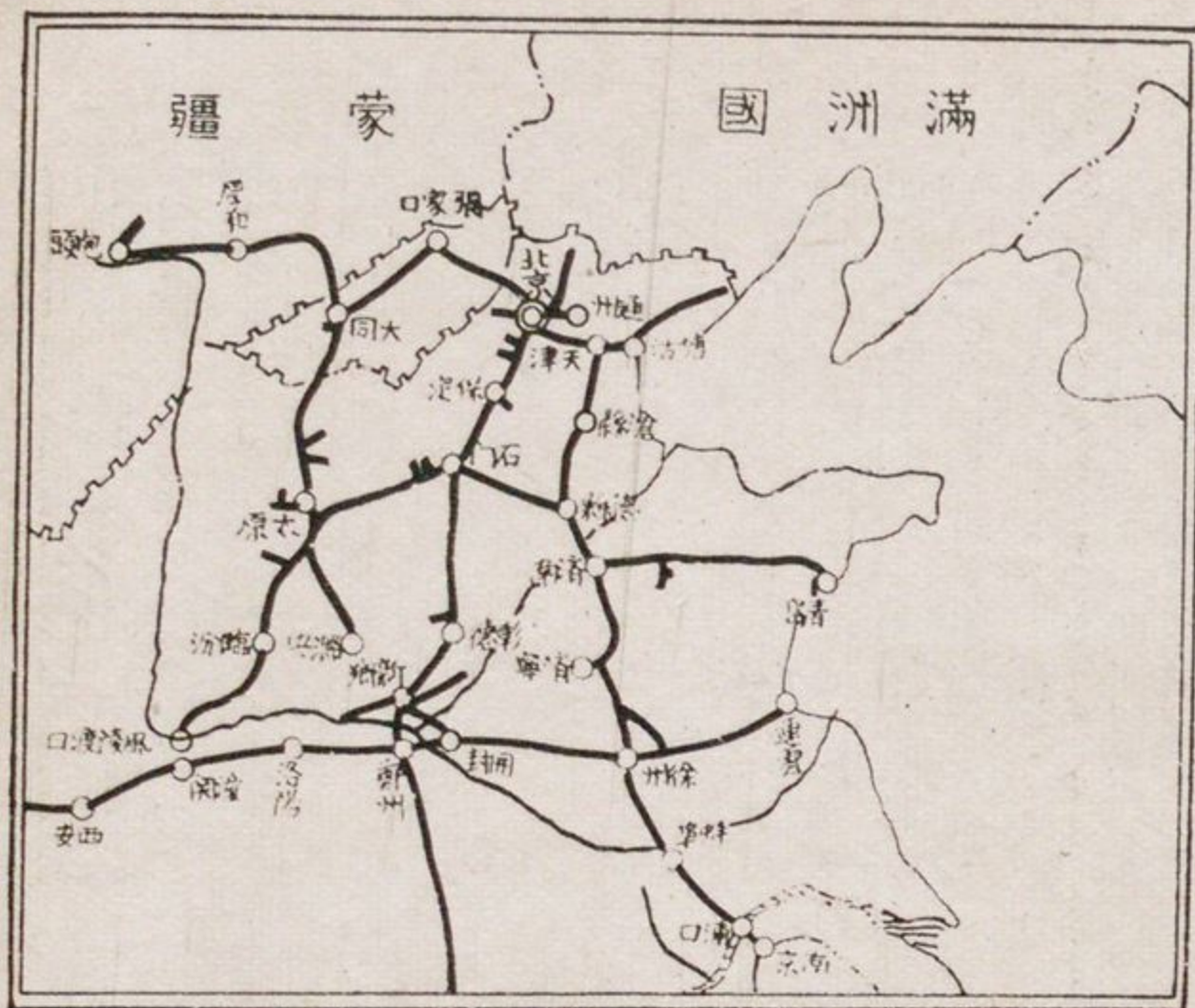
北支の土地と人

新舊交通

唐の詩人は『行路難！行路難！大行の路は車を摧く』と歎いた。車馬にだけ頼らなければならなかつた昔、峻坂に苦しみ泥濘に惱み然も旅程が長くなれば長い程途上の不安は愈〻募る。尤も官用なら道路も用意され驛制も布かれ便利になつてゐたが、交通機關として舟車と馬背に頼ることだけは三代以來殆んど變化をみなかつたのである。商取引が緩漫で交易範圍の短い間はそれでもよかつた。それが一度世界貿易に引込まれ世界の市場相場の圏外に在ることが許されなくなると共に、支那商人もラジオを買つて上海、香港は勿論各地のニュースを聞いて迅速に取引を處理して行く必要が起きて來た。やむを得ず外國人の汽船や汽車にも一應の不安と不便を感じつつ利用する。そしてかういふことから新しい交通機關に對する認識も昂められて行つた

鐵路に體を横へて反對した嘗ての日の無智は、この昂まつた認識と必要の下に忽ち笑ひ話とされる。北支の對外貿易の主なものは農産物であり、賣却

昔の山越え（五臺山にて）――新民會寫眞室提供

The Land and the Peoples of North China
(From Horse-Power to Steam Engine)

費の九十%は交通費にとられる。價格を下げ收入を増すこと、それには人畜の力に頼らずそれより數倍安く速く運べる鐵道を敷設して利用して行くことである。このことは外國製品の輸入にも見られる

華北の榮える道、それは日に伸びて行く鐵道にある。即ち華北は鐵道と共に榮えて行くのである

大行山脈を横斷する列車

正定の石塔——四角多層の石塔は唐代から行はれた

佛塔

Buddhist Pagodas

冬枯れの殺風景を突如として破つて呉れるのは、佛塔である。見渡す限り坦坦とした黄土の平原、そこはみな悉くが耕作されてゐるけれど、冬になると綠と云ふものが全くない。彼方此方に箒のやうな楊柳が樹ち、その處々に部落が見える。部落も亦土で積み重ねたものだ。かうした單調を破つて呉れるのが佛塔である。紺碧の空をつんざくが如く高くそびえて、依然として生命を持ち續けてゐる景物であると思はれるものなのだ

塔の字は塔婆の略で、又率堵波とも云ふ。印度の古い言葉では Stūpa 或は Thūpa など稱するが、それが支那に佛教と一緒に入つて來た。それから我が國にも來たことは云ふ迄もある

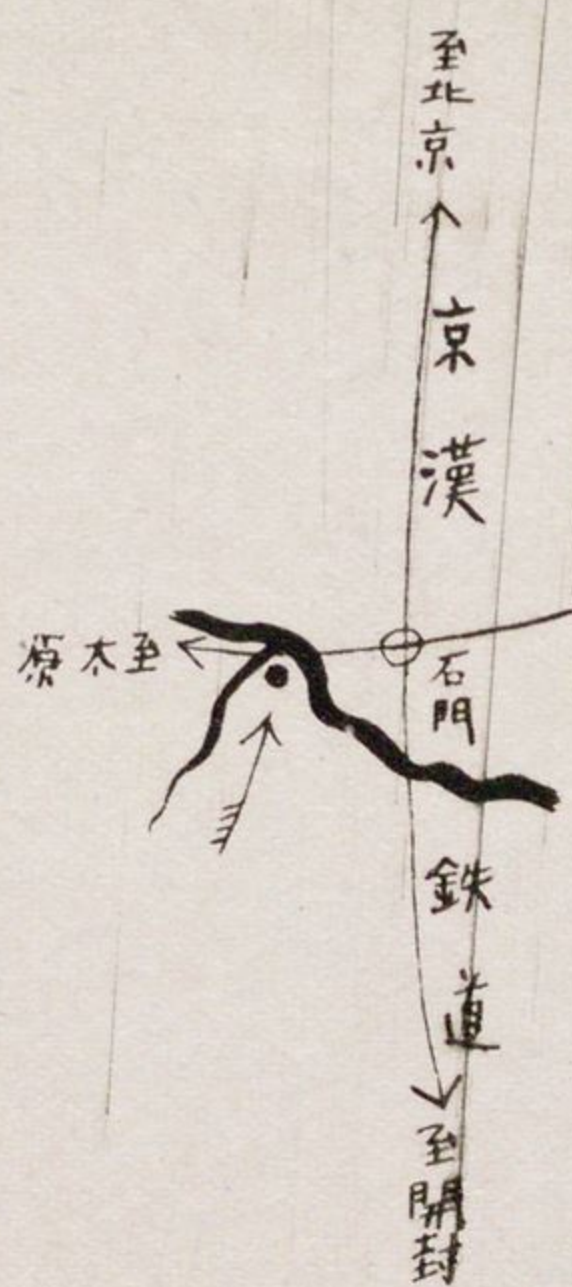
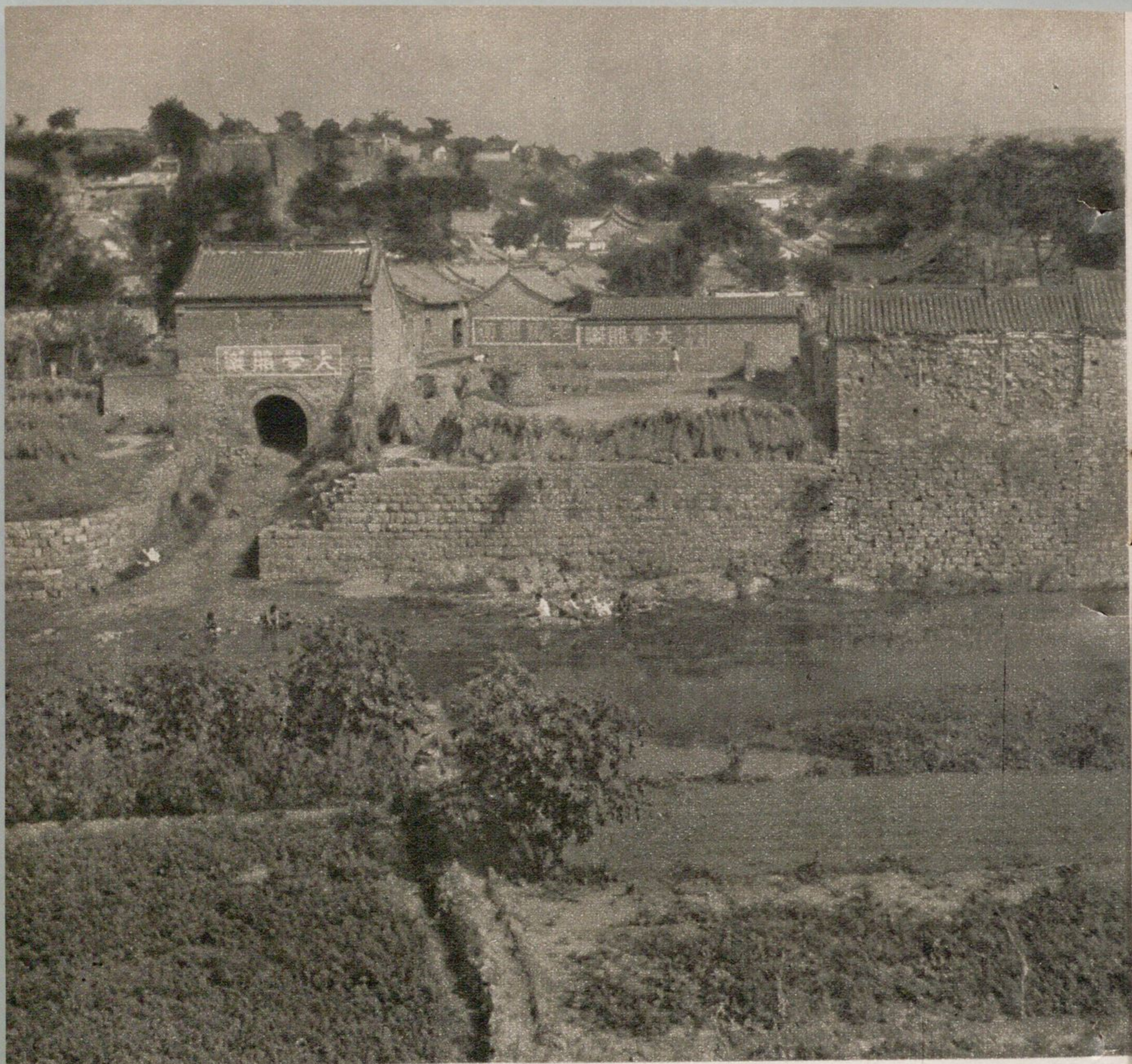
正定の多角多層の塼塔——此の様式の塔も唐代からはじまつたものと考へられ

まい。元來これは土石を積んで造つた墳墓を意味するのであるが、印度の或る地方ではこれを別に Dagaba とも云ふ。かうした言葉が歐洲へも傳へられ Pagode と稱し Jope となつた。Jower なども恐らく同じ語源から出たのであらう。さうしてみると印度の塔婆樣式は東西兩洋に廣布したものである。而もこれは地方地方で各の特色を發展させた。北支那に現存してゐるものは千五百年以前のものから近代に至るものである。從つて種類も一にして止まらないが、遼金頃のものが最も數多い。もつとも近代になつてからキリスト教がどんな片田舍までも入り込んで行つて遠慮もなく十字架を戴いた會堂を建築し、事變以來、更に目ぼしいものとして、鉢開きの給水塔が汽車の驛と云ふ驛にコンクリートで築造された。これ等こそ封建的な風景を切崩して行くすばらしい建築であると評されるかも知れない。それにくらべると佛塔はもう過去のものだ。然し、或る場所に於いては惡くない。北支には新しいものと古いものが交錯してゐる。その點風景に於いても同樣である。佛塔などは後者に屬するのは勿論乍ら、美しい傳統を持つた景物である

漢淮陰侯設背水陣處
嘉慶廿年二月
咸豐九年五月
山西候補
福瑨 重立

陣處の趾に建つ碑文の拓本とり

二千數百年の昔、韓信善戰の地、今は皇軍占領下、縣の清水は靜かに流れてゐる

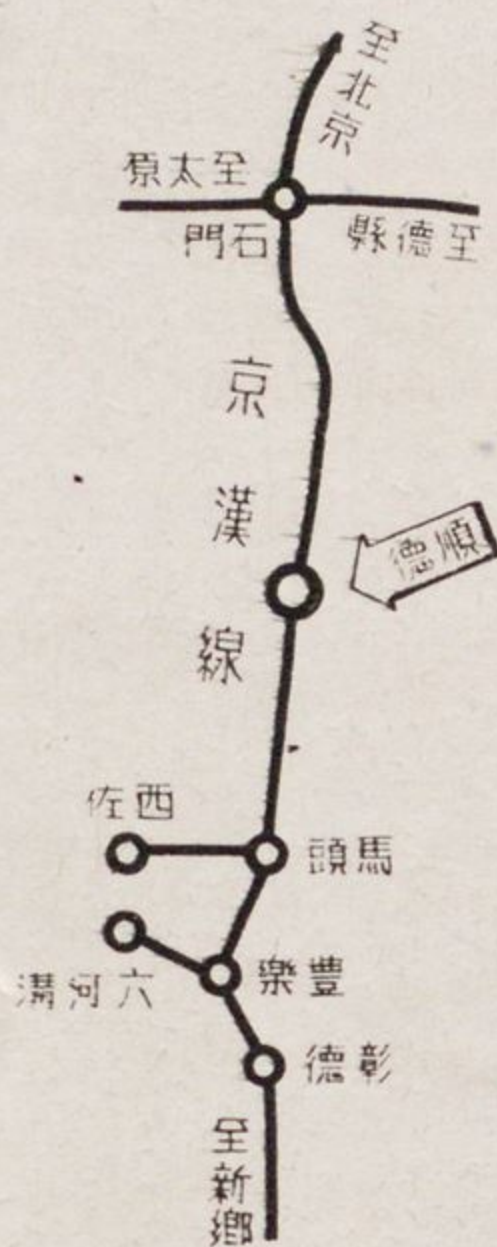
背水陣處のある微水村

Ancient Monuments to Death-Defying Battles

背水陣處のあるところ

後に大を成さんとする者には忍耐が要求される。その例として、曾て日本の國定修身教科書は「韓信の胯潜り」の物語を擧げた。韓信は張良、蕭何と共に――二十六主四百七年の漢朝を創建して支那王朝文化建成史上最大英雄の一人となつた――漢の高祖劉邦の三大武將の一人であり、その随一であるが彼韓信が趙を撃つて井徑口に出た時、水を背にして陣し、戰ふに及んで大いにこれを破つた。戰捷を賀した諸將が背水の故を問うたのに信は「死地に陥りて後生き、亡地に投じて後存するなり」と曰つた。漢書本傳に「背水の陣は兵法に於ける絶地なり」とあるが、上の言はまさに名將のそれたるに背かない

背水の陣の「水」といふのは石門・太原間の石太線の微水驛附近を流れる緜水（或は緜蔓水）とされてゐる。然し戰蹟微水の呼物である「漢淮陰侯設背水陣處」なる一碑はその支流である微水に沿うた微水と稱する部落のなかにある。尙ほ井徑口といふのは井徑關の口の意味であり、現在の微水驛の東方に當る

椅子をつくる

岡村吉衛門 文
坂本萬七 撮影

Chairs in the Process of Making

この形はもともと南方の竹椅子から來たものであることを想はせるに充分である。この曲木椅子に於て竹を木と置き換へるといふ離れ業を見事にやつてのけた。然も柳の木の性質を生かし切つた合理的な構造が何よりものを云ふ。それ以上に形の立派さ美しさがのたうち廻るやうに隅々にまではびこる

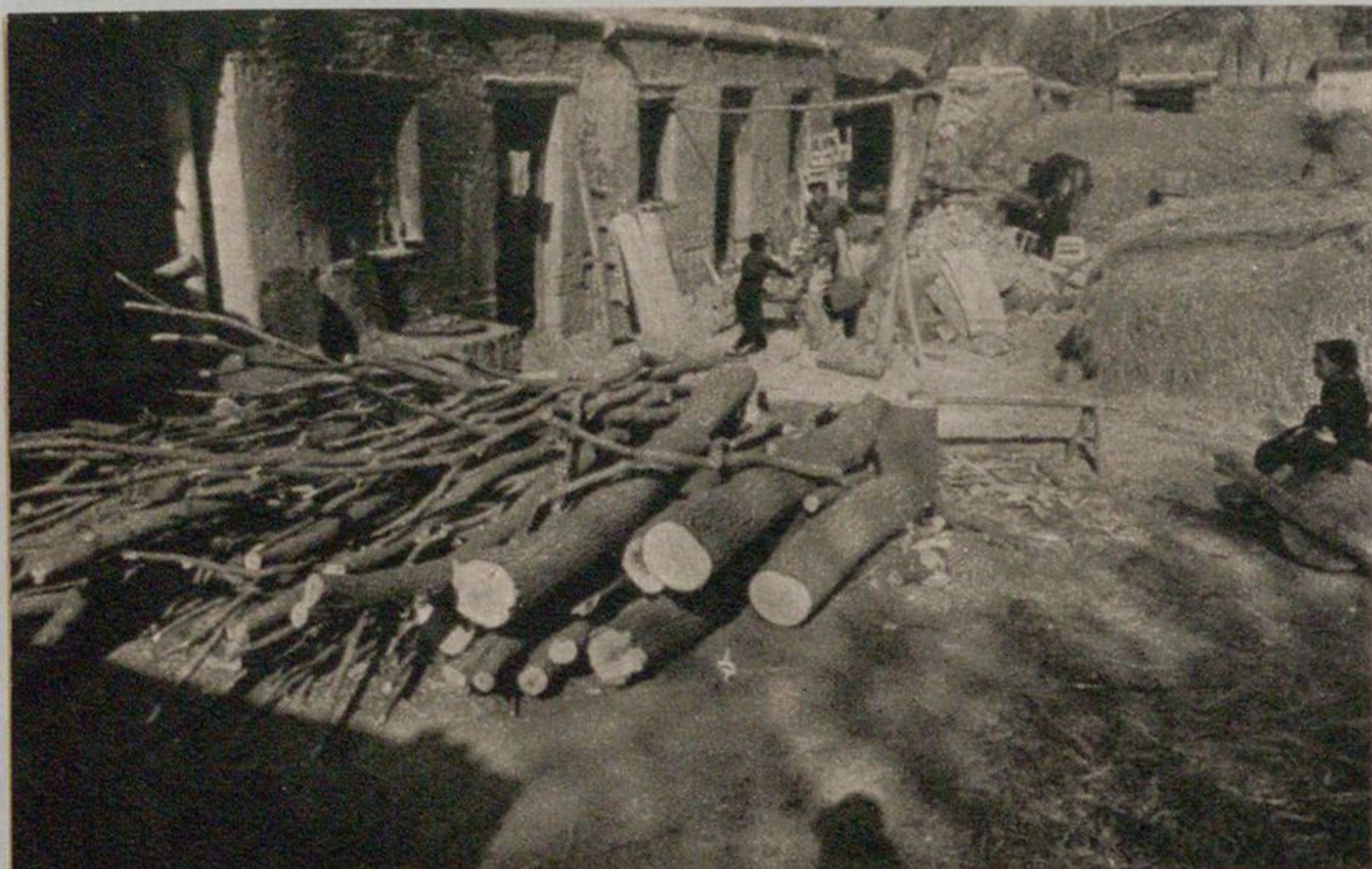
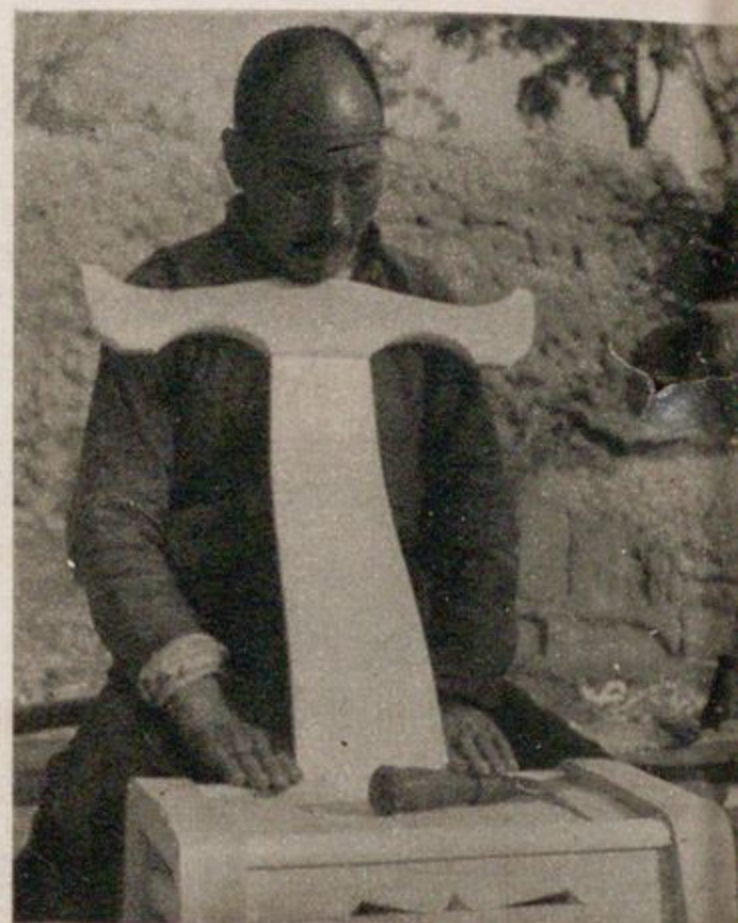
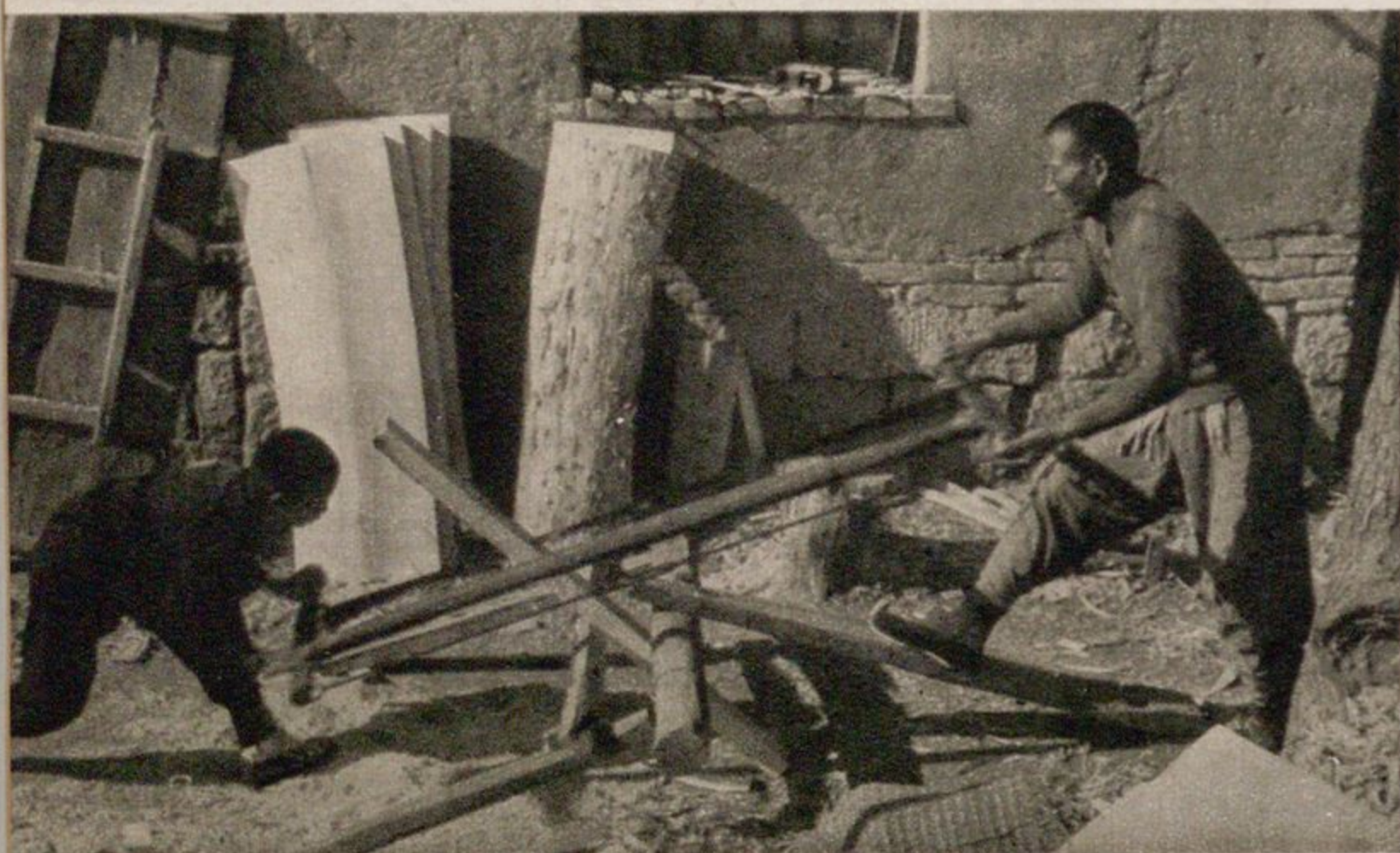
産地は北支一帶であるが、河北省順德のものが他を壓して立派で仕事も親切である。職人は申し合せた如く河南省沁陽縣西紫陵府の出身で北支各地に散つては農業の傍らの半農半工。支那工藝の下手物に通有の誇張も無く、餘分な裝飾も何一つなく最少限度の必要な材料だけの生んだ簡素な美しさには彼等農民のいのちのいぶきが傳統を通して脈打つ。木を挽き、削り、蒸しては曲げ、組立てて仕上げする。工程は非常に分業的で製法も極めて簡單にやつてのける。道具もさう多くはないが巧妙に使ひ分ける。兎に角、要諦を極めた仕事と云つていい。種類は、高さ四寸位の小橙子（腰掛け）から二尺四五寸の大椅子（ひぢかけ）迄大小七八種、大體日本にしろ支那にしろ椅子工藝に於ては皆教養の無さをさらけ出して淺ましいが、この椅子だけは西洋のものに何等わざはひされず支那本來のものを示してくれる。このままでも勿論いいが、足の長さとひぢかけを前に少しつめることによつて我々の何よりの手頃な使ひいいものになるのは有難い。西洋を代表する英國ウインザー系の椅子に堂々と太刀打ちする格の高い椅子を北支民衆は持つてゐるのだ

仕上げ

椅子をつくる 2

① 柳の椅子
② 道具——右から物指、のみ（木をさくに用ふ）
鉋、斧、せん二箇
③ もたれの位置を目分量で決める
④ 組立て
⑤ 釜でむして板を曲げる
⑥ 材料の柳の木
⑦ 親子して椅子の脚を挽く
⑧ 腕木を曲げる
⑨ 仕上げの削り

1

Chairs in the Process of Making

Winter Scenes

冬

華やかな數々の歷史を祕めた黃甍朱柱の高樓が、樹海の上に浮んでゐる。仰ぎ見るエメラルド色の蒼穹は、それ自體が一つの大きな寶玉である

その空の何處かで、朔風の訪れが聞こえると、此處北京には一足とびに冬がやつて來るのだ

昨日までは豪奢な毛皮のオーヴアに、豐滿な肢體を包んだヤンキーガールが制服制帽のマリンを從へて交民巷（公使館區域）香港上海バンクの時計塔の下邊りを、颯爽と急ぐ姿が見受けられたのだが……阿片戰爭以來百年、金權と武力をかざして濶步橫行した彼等は今や大東亞解放の嵐に遭つて枯葉のやうに姿をひそめてしまつた

今日——王府井、東單、西單、天橋等の盛り場の鋪道を染める薄雪を踏んで壁新聞の戰況ニユースに眼を据ゑてゐる若い北京人の面上にも、胡同の陽だまりに小鳥籠を持ち出して、眼を細めてゐる老北京人の額の皺にも、心なしか、明るい希望が宿つてゐる

北京を取卷く蜿蜒十里の城壁は、今や興隆アジアの夢をはらんで大陸の冬の原野に嚴然と聳えてゐる

北支の英米權益消え去る

北京交民巷入口に義和團事件當時の彈痕が殘り「忘るれ勿れ」と英文で記されてある

北京交民巷英國系、香港上海銀行

北支に於ける外國權益、殊に敵性のものとして今は既に我が實力下に把握されたものではどんなものが最後まで殘されてゐたであらうか

例の義和團事件以來、外交團の居住する區域として一郭を限られた謂ゆる東交民巷の一帶には、公使館、兵營をはじめ米英系の五銀行（滙豐銀行（ホンコンシャンハイバンク）、

開灤炭礦碼頭

開灤炭の積出し

天津英租界ヴイクトリア・ロード

花旗銀行(ナシヨナル・バンク)、麥加利銀行(チヤータード・バンク)、美國通運銀行(アメリカン・エキスプレス)通隆銀行(トーマス・クツク)）その他若干の商社があり、何れも堂々たる建築と廣大な敷地を占有してゐた（次頁へつゞく）

After the American & British Properties were sealed in Peking

北京交民巷外國人小學校

メリカの援助を受けてゐた北京に殘る唯一の敵性大學の校舍燕京大學

燕京大學の校舍

燕京女子大學生

また、市内に於ては協和醫院と、これに隣接する協和醫學院があり、内一區三條胡同に聳え立つ青いらかの城郭の如き厖大さと、その設備の完備優秀を誇つたもので、米の大資本家ロツク・フエラー系の病院であつた。また城外の燕京大學の如きも豪華な校舍を持ち外人及び支那上流の子女を學生として贅澤な教育を施してゐた。そのほか、中、女學校、救世園、映畫館等も少なくなかつたが、それ等が凡て、教育、宗教の美名にかくれ、ともすれば敵性野望の先驅となり勝ちであつたことは今となつては彼等のために不幸なことであつた

又、有名な開灤炭礦の如きも、最後まで殘された敵性權益の唯一のものであつたが、今は我が手によつて以前に變らぬ活躍を續けられてゐる

燕京大學體育場

北支の英米權益消え去る

莫大なアメリカの援助をうけてゐるロックフェラー病院

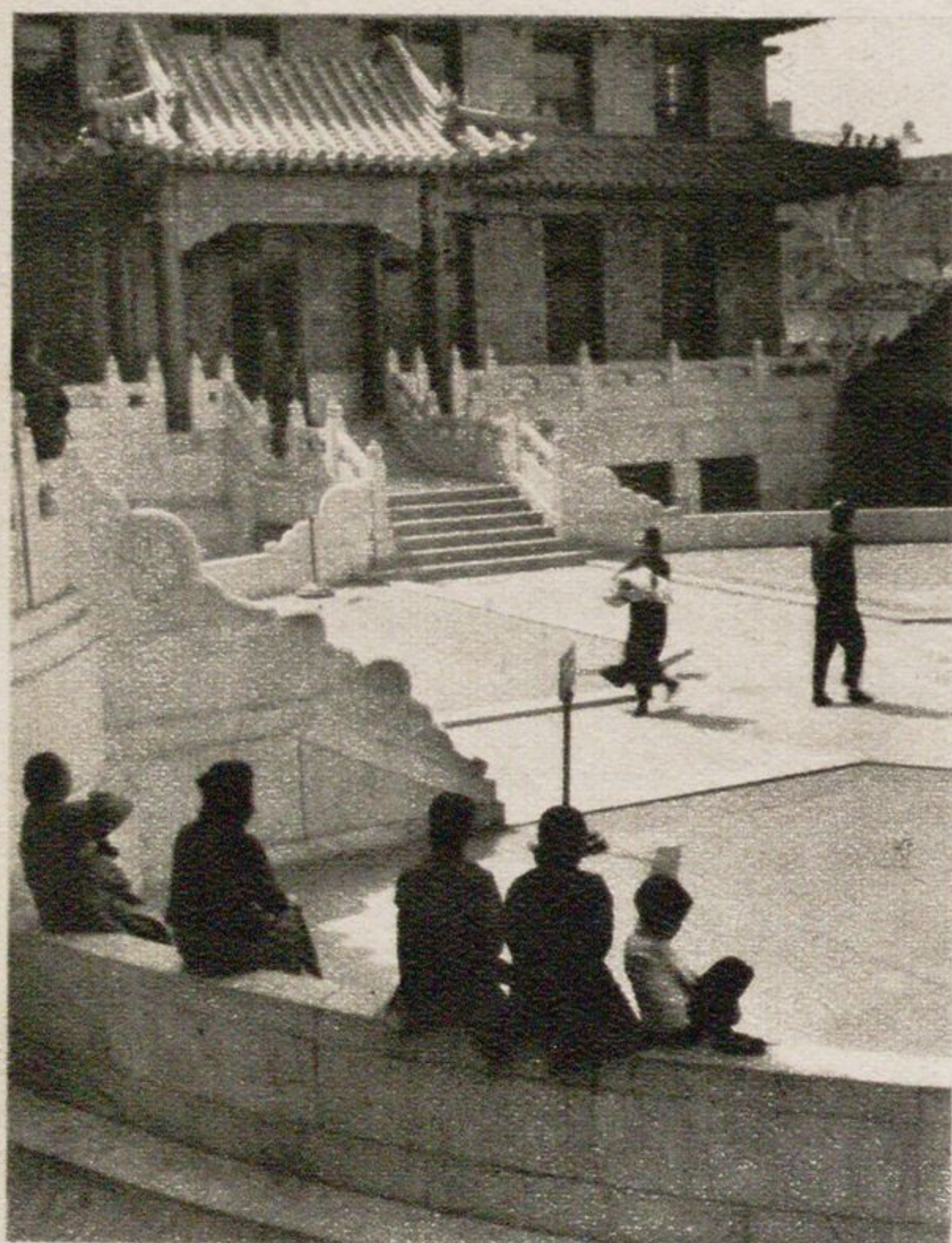
After the American & British Properties were sealed in Peking

ロックフェラー病院入口

ロックフェラー病院の看護婦

無敵！國産第一位

ムッソリーニペン

スラスラ書けて
錆びず値の廉い
國産逸品！

クラウン万年筆

新生國策イリヂュウム
白金ペン付

書きよく
體裁優美
構造堅牢

流線型

北京・北海公園

大阪・東京・小倉
株式會社 澤井商店

北京夕照寺の壁畫

小野勝年

北京の內城の崇文門（哈達門）を過ぎて外城に出る。花市大街を通り拔け東南の方向に行くと、その邊は既に場末であつて、人家もまばらとなり、あたりは殆んど畑である。

鐵道を横切り、南面すると道路の右手に朱壁の一郭がある。

これが夕照寺で、南側に廻つて寺の正面に出ると、山門には「古蹟夕照寺」と書いてあり、前に二三本の槐樹が植つてゐる。

側門から境內に入る。配殿の一部は村の公所に使用され、一部は機織工場となつてゐる。工場と云つても勿論大掛りなものではなく、數人の者が仕事をして居る程度である。

寺院には僧侶らしい者が見當らないで、割合荒廢した樣子もなく、本殿や後殿も整つてゐる。

寺名は、言ふまでもなく、燕京八景の「金臺夕照」からつけたものであるが、寺史を語るものに乏しく、その創建年代の如きは全く不明である。境內に建つてゐる乾隆二十四年の、寂照寺記、その他の文獻に據つて考へるに、清朝の初めに全く圮廢し、今の殿宇の建立されたのは大體雍正年間以後のことであると考へられる。

寺名も曾ては寂照寺と云ひ、後になつて夕照と改めたのか、初めから夕照と稱してゐたのかすら明らかでない。從つて、この寺院にはさしたる由緒はないのであらう。これが比較的著名なのは、名稱の雅なる點と、後殿內に陳壽山の筆になる壁畫のあるがためであると思ふ。

陳壽山の描いた壁畫のことは、既に我が國で著はされた「唐土名勝圖會」にも見えてゐる。同書は清代に於ける京畿地方に就て記載した德川末期の誇る可き著作ではあるが、著者自身、親しく大陸に渡つて見聞したことを記したものではなく、諸書を編纂飜譯して出來たものである。さればその原本たる清代の著書中に、この壁畫が名筆として喧傳されてゐることは勿論のことである。

しかし、古いものの保存され難い支那のこと故、かうした名畫が、果してその儘殘つてゐるか否か氣掛りであつた。然るに、一昨年初めて機を得て此處を訪れ、若干の龜裂と、雨漏のための汚損とにも拘らず、意外に良好な保存狀態を見た時には、流石に嬉しかつた。それと共に、壁一重隔てた一間は機織り部屋に使用されてゐると云つた次第で、さうしたものに對する無關心に對しても、それはなにもこの場合のみに限つたことではないのであるが、慄然とせざるを得なかつた。

偖て、壁畫のあるのは、寺の後殿であり、殿の建築は切妻造り、正面五間は前に長く庇を出してゐる。軒には中央に大悲殿、左右に梓潼寶殿、伏魔寶殿の額が揚げられてある。これに依つて、中央に觀音を祀り、左に文昌帝、右に關帝を奉じたことが窺はれる。

殿の內部もまた、壁に依つて區切られ、中央が三間、左右が各〻一間で、この壁畫のあるのは大悲殿の西壁である。

畫壁の構造は、別に變つた點も無く腰壁に當る部分の高さ約四尺ばかりを

內容

第四巻第二號

煉瓦で積み、その上の壁面を漆喰で堅く塗り、これに壽山が筆を揮つてゐるのである。この廣さが、大略横二十尺餘り、縦十三尺前後である。東壁の構造もまた同様で、それには王平圃が梁の沈約の作つた高松賦を書いてあり、これの方がより完全に殘つてゐる。

畫面に對すると、太く力強い幹を持つた五本の古木が南に向つて一様に枝を張つてゐる。樹木以外には何物をも現さず、下方に二つ、上方に一つある大きな空間は却て效果的で、恰も深山幽谷にある大樹たるの感あらしめる。

構圖の大膽さ、筆法の雄勁豪放、而も樹木に對する寫實的な表現等、見る者をして思はず惹きつけずには置かぬ底力を持つてゐる。其處には一種の氣迫とでも名付く可きものが漂つてゐるのである。

樹齢百歳の大木は、長き風雨との苦闘を示し、幹はよぢ曲つて、處々枯れてゐる。それにも拘らず、此處では闘ひ抜いて遂に到達した超克の境地を傳へるに十分である。

五本のうち、四本は明らかに松であるが、他の一本は闊葉樹らしく、或は眞柏の類ではあるまいかとも解せられる。北京では俗に眞柏の類を松樹(スンシュ)と呼ぶ場合もある。

四本は何れも墨彩を振ひ、他の一本は黒褐色を用ひてゐる。畫面に向つてゐると、自身もまた深山に立ち、耳を傾ければ、何處からともなく松籟が聽えて來るかのやうである。

筆者、陳壽山の傳記は、「國朝耆獻類徵」初編に短文ながら、掲載されてゐる。それに依ると、彼は安徽の天長の產で名を松と云ひ(他書には崧とも書いてある)、壽山はその字である。資性豪宕、繪畫を巧みにした。若かりし頃湖南湖北を遊歴したが、人の認めるところとならず、遂に北京に來て、淸の宗室照樾の邸に寄食した。

彼の繪は鄭板橋の流派を汲み、そのために頗る人々の訾議するところとなつた。然し、松を描けば頗る意を得たものであつたと言ふ。

更に夕照寺に壁畫を描いたことに觸れ、「嘗て夕照寺の壁間に於て大松數株を畫く、枝幹長さ數十尺、夏日これを觀れば、謖々として聲あり、身は深山中に在るが如し。人々これを愛す。思ふに先生終身の筆墨は、唯これを最後となすと云ふ」と記してゐる。

年五十歳に至らずして歿し、生涯仕官せず、謂ゆる處士に終つた。彼の一生は轗軻不遇であつたらしい。

「畫苑祕笈」に收められた兪蛟の「讀畫閒評」の中にも、彼の傳が見えてゐるが、それに依ると「筆に匠氣多く、これを觀れば人をして胸次に惡(寒)をおこさしむ。故にその畫は常に市廛

商販及び胥掾の寶とするところなるも騷壇藝苑の士は縑素を持つてその揮灑を乞ふものあることなし」と評してゐる。但し、夕照寺の壁畫に就ては「獨り夕照の五松は離奇夭嬌、蒼翠濃鬱であり、恍として謖々たる濤聲の簷際より起り、身を千巖萬壑の間に置くが如くである。余は寺に入る每に、必ず瞻玩し、晷の移るも去るに忍びぬほどである」と絶賞してゐる。

東壁の書は前にも述べたやうに梁の沈約の高松賦をば王安昆が書いたものである。これまた筆致頗る雄渾、墨痕淋漓たる行書體であつて、名家の跡として推奬するに足りるものである。

「天咫偶聞」の著者の如きも、「壁の高さ丈餘あり、而も行款端若、繩を引すらまた易からぬを」と稱めてゐる。

高松賦の後に跋があり、それに依ると、京師の左安門外の弘善寺靜觀堂の兩壁には、康熙年間、陳香泉と禹之鼎とで雙鶴圖と畫鶴賦とを書き人の慕つて觀る者が多かつた。そこで夕照寺の恒吉和尚は寺壁を立派にして余（王安昆）と陳松とに各〻染筆せんことを願つた。

二人は和尚の意を嘉みし、乾隆四十年六月九日、遂に業願を終つた。書は拙劣で、前人と美を競ふことは出來ないが、壽山の畫は筆墨陰森、風雨を一堂にあつむるが如くだ。若し遊人これを觀るならば、心自づから清涼となるであらう。實に法師に替つて說教するに足りるものである、と述べてゐる。

今日では弘善寺は既に廢圮して跡を訪れるに値ひしないが曾ては陳香泉、禹之鼎の名跡があつて、都下に知られ人々のこれを觀る者が多かつた。

夕照寺の壁畫は固よりこれの向ふを張つて描いたものに他ならない。前者は亡び後者が幸にも今日に傳つて我々の眼を喜こばしめるのである。

「讀畫間評」には、又次の樣に見えてゐる。それは壽山の作畫の時は丁度眞夏であつた。彼は着物を脫ぎ裸體となつて大酒盃で連飲しながら墨を摺り、それを素燒の壺に貯へた。それから長らく壁面を睨みつけ、そこで机を積み上げて足場とし、愈〻筆をとり、皴使したのである。午頃、一天かき曇り大雷雨となつた。恰も黄河の水が吐瀉するかの如き凄まじい勢で、しぶきは猛烈に階下に飛び散るのであつた。そして庭には一尺許りも水が溜つた。

雨が霽れると繪も完成した。時に戸外は猶、夕陽が高かつた。これは寺僧の語つてくれた話であるが、これでみると、實に彼の繪は古人が謂ゆる「胸に成稿あり、意は筆先に在り」との評と一致するものであると。

偖て、惟ふに陳松の名聲は、生前むしろ低かつた。それは前にも記した樣に、或は人の訾議するところとなつたと云ひ、或は商販や胥掾の寶とするところではあつたが、騷壇藝苑からは冷笑を以て迎へられたとあるところから推しても明白である。又一說には、彼は鄭板橋の流れを汲む者であつたとも傳へられてゐる。

板橋は名を燮、字を克柔と云ひ、乾隆初年進士となり、後に山東濰縣の知事として令名の高かつた人であるが、今日に至る迄、その名が膾炙されてゐるのは寧ろ餘技である書畫詩詞によつてである。彼の畫中、最も得意とするところは蘭竹であるが、その畫風を一言にして述べると、當時の畫壇を白眼視しつつ、技巧を排し、野趣を好み、而も高雅を忘れなかつたと許し得る。

併し、かかる傾向のために當代の人人からはややもすれば異端を以て目された憾みもないではなかつた。

陳松もまた「壽山と談ずれば、その繪を置きて論ぜずとも可なり」と評されたやうに、人物は俗流と異つてゐたらしい。從つて彼が鄭板橋を宗としたと云ふやうなことは、必ずしも否定し得ないであらう。しかし、一面、彼に揮毫を依頼したのは俗物が多かつたと云ふ記載もあるのであるから、未だ彼の畫蹟の夕照寺の壁畫以外に知られてゐない今日にあつては、その流派に就ては遽かに斷定し難いものがある。

「讀畫間評」の著者の如き、「壽山が塗抹の半生」と云ふやうな言葉をさへ用ひて居るところから推せば、猶更のことであらう。

然しそれは兎に角として、もう一度静かに彼の畫面を觀ようではないか。偉大と云ふやうな形容で輕々しく評し去ることが容されぬとしても、何處からともなく漂つて來る眞摯な風韻と豪宕な氣迫は、理解してやつてもよからう。この構圖の大膽さと筆意の遒勁さはどうであらう。

蓋し、乾隆も四十年代になると清朝文化は爛熟期に達し、そこには既に廢頽や沈滯が色濃くなる。そして畫壇の風潮も漸くマンネリズムが支配的となつて、潑剌たる生氣が乏しくなつて來るやうに解せられる。併し、私は草莽の内に壽山の松の如き、否却つて草莽なればこそかも知れぬか、猶かうした精神を發見し得て、今更の如くに「支那の大きさ」に嘆ぜざるを得ないのである。（筆者は華北交通資業局資料室員）

北京回教徒の職業

白 仲 義

従來、日本人の回教に對する關心は一部を除いては多くは趣味の範圍に於て取扱はれ研究されて來たが、事變以來中國回教徒が謂ゆる西北問題の主役として登場するに及んで日本の朝野は熾烈な關心を注ぐにいたり、回教徒並びにこれが對策を調査研究されるやうになつた。

さて、北京に於ける回教徒の禮拜寺は城內外にて四十八座を數へ、最も古い歷史を持つ禮拜寺は廣安門內牛街にある。その禮拜寺緣起に據ると、宋太宗の世に西域人「那迷魯定」勅を奉じて建立したものであるといふ。

これが北京に於ける禮拜寺の嚆矢である。元代に至つては東西に亙る大帝國が建設され、陸上交通が大いに開かれたため、東西文明の融合を見るに至り、特に中亞回教徒商人は漠北に於て目覺しく活躍し、彼等は北方遊牧部族との貿易に、巨利を博した者が多かつた。東に蒙古帝國成立後は、その政策として、文化程度の高き西域人を重用し、政府の要職にも任命され、西域人中回々人は最も有力であつたと謂はれて居り元代回教徒は社會的、經濟的に重用な地位を占めて居たのであつた。

北京に於ては、世祖の世に都を「大都」卽ち北京に奠めてより、回教徒のこれに從つて移住する者多く、當時には東四牌樓施南、東直門外二里莊、安定門內二條胡同の三清眞寺が建立された。次で明代には、北平は北京となつて全國政治經濟の中心となり、江南の殷實富戶を招いたため、當時江南一帶に勢力を張つて居た回教徒のうち、居を北京に移す者が多かつた。

また建國の功臣に常遇春、湯和、鄧愈、藍玉、胡大海等の回教徒があり、社會的にも勢力を持つてゐて當時五座の清眞寺が建立された。下つて清代に於ては陝西、甘肅、新疆、雲南の諸亂にも見るが如く、異教徒との摩擦もあつたが、清朝の懷柔策もあつて漸く衰微の過程にあつた。しかし、異教徒の侵犯を蒙ること少く、三十二座の清眞寺が建立された。

民國に至つては彼等獨特の宗教上の戒律、教育の缺陷並びに非社會的な態度等に因つて外圍文化の急激な發展に伴はず、事每に置き去りの狀態に置かれたため社會的にも經濟的にも益〻微力となり、現在では窮民が多いので窮回などと異教徒から蔑視されるやうになつた。今日までに二座の清眞寺と、六座の清眞寺——女子のための禮拜寺が建立された。

北京回教徒數に就ては、或る人は十七萬と云ひ、或る人は十萬と云ふが、筆者の調査では戶數約一萬、人口五萬見當と思はれる。教徒の多くは禮拜寺の附近に聚居してゐて特に廣安門內牛街附近には最も多く住んでゐる。

現在、彼等の主なる職業としては、豚を除く畜產關係業、卽ち羊行、牛行、飲食關係業、珠寶玉石業等がある。

羊行は生羊行、熟羊行とがあり、生羊行には、羊販（產地と消費地間を來往して羊の取引に從ふ者で、北京の業者中の八割は回教徒である）、羊店（羊取引の經紀で、德勝門外にも回教徒四戶、異教徒二戶の業者がある）、把頭（羊店附近の農民や、小商人が副業として從事して居り、業者は凡て回教徒で、羊販の羊店に到る每にその旨を馴染の羊肉莊に通知し、取引に就ては羊の鑑定、價格の取り極め等をなし、取引濟の羊を買方の院內まで運ぶ。報酬は買方から年額四、五十元の謝禮を受ける）がある。

熟羊行には、屠宰者（市營屠宰場が出來るまでは各羊肉莊、飯莊等の自由屠宰によつたものであるが、その後は天橋福長街の市營屠宰場と德勝門外の馬甸分場に於て行はれ、現在は八十二三戶の回民業者がある）、羊肉莊（羊行中羊販、羊店、把頭を除くの外は、皆羊肉莊で、羊肉專門のものと牛肉兼業者）がある。

牛行とは牛販、牛店、牛鍋坊、牛肉莊等の總稱である。牛販（業者中には京東の通縣北塢居住の回民が多い。彼等は通縣、三河縣夏墊、遠きは濟南、張家口、張北方面を來往し、生牛の販運に從事し、北京近鄉の農家、牛鍋坊等の需めに應ずる）、牛店（牛販と需要者の仲介者で牛販の宿泊の施設を有し、店の斡旋料としては賣買雙方から一頭當り一元宛を徵し、別に買方は特畜捐從價の三分を納付する）、牛鍋坊（屠宰業者で從事する者凡て回民である。市營屠宰場成立以後、民國二十九年五月牛鍋坊同業公會が組織され、現在では二十五戶の會員がある）。牛肉莊（屠宰場成立以前は自由屠宰に從事して居たが、今日では、生肉販賣の專業となつた。斯業者中には牛肉業者と羊肉兼業者の二種あり、前者は十五、六戶、後者は三十四、五戶ある）等である。

珠寶玉石は唐末、宋代、回民移住の

初期に於て、その貿易品として海を越え中國に輸入された關係上、久しきに亙り家業として技術的にも洗煉され、營業上獨自の境地が開かれ、俗に識寶回々とまで稱せらるるに至つた。

前淸までは、服制冠帶に珠玉が用ひられ、一般婦女子の間にも賞玩せられて、商況繁盛を極めたが、民國以降、諸制の改革や遷都に逢ひ、富豪顯官の離京する者が多く、頓に振はなくなつた。支那事變迄は外人筋の需要もあつたが、其後は客足も少なくなり、奇を好む日本人間に若干の商ひを見る程度である。現在、業者數は回民六十二、三戸。異教徒百二、三十戸で、回民業者中の四十五、六戸は前門外廊房二條に軒を連ねて居る。

飲食業者のうち、主なるものは飯莊である。回教徒經營の飯莊は全市を通じ百二十餘戸。由來回民はその教規に因り、異教徒とは飲食を異にしてゐるため、顧客はやや限定せられた觀はあるが、近頃日本人側の客足が多く、東安市場の東來順飯館の如きは、優に異教徒側の一流を凌いで居る。この他、飲食業者としては燒餠舖、糕點舖（菓子屋）、賣零食業（屋臺を曳いて切糕や豆腐兒等を市中の勞工に鬻ぐ稼業）があり、一般に略食として市民の需要も多く、廣衖、狹巷、到る處に「淸眞回回」を看板にしてゐる回教徒業者が見られる。このことは回教徒に下層階級の多いことの一つの現れであらう。

相當の商店を構へてゐる回教徒も、銀行其他近代金融組織を利用する者は殆ど無く、閻王賬、打印子等と稱せられる高利貸が唯一の金融機關である。

閻王賬は、その貸付金額も數十元から數千元に及び、擔保、中保、舖保等の條件を附し、貸付金額は擔保物件の評價額の五掛以內とせられてゐる。金利は月二分前後が普通で、期限は一定してゐないが一年以上に亙るものは殆どなく「九八出滿錢」と稱し、貸付の際には當月分の利息、中保人の保證料の百分の五、このほか代書料若干を取られ、結局借款人の手取りは額面の約九掛となる。

打印子は、放印子とも謂はれ、業者は概ね破戶漢の類に等しく、貸付金は一元から二十元程度、貸付期間は二十日から六十日迄、貸付方法は通常は貸款時に額面の一割を控除せるものを借款人に交付し、額面の金額を期間の日數に均分して連日貸款人が出向いて取立てる。貸款手續きとしては擔保や契約書を用ひないが、貸款人から借款人に通帳を交付し、拂込の都度領收の捺印をなす程度で極めて簡單であるが、支拂滯りの場合には衣類を剝ぐ等は東西同風である。

質草もない細民層に於ては、最も簡便な借金方法なので、回民の小販、勞工にして彼等の餌食とならざるはなく一日の收入はその支拂ひに追はれて益ゝ窮乏の底に追ひ込まれる者が多い。

前述のやうに彼等の職業が主に畜產關係、飲食關係であるのは、彼等が嘗て中亞の遊牧民族であり、多くの者はこれ等生畜の取引、飼育、屠宰等に、從事してゐたことに因るものと思はれる。卽ち、豚肉の食用禁止、回教徒獨特の方法で屠宰された生畜以外の食用や異教徒の飲食店での食事は嚴禁されて居るためである。

嘗て、亞、歐、阿の三大陸に亙り、サラセン人或は大食人として其の勢力を擅にせる時代に、中國に於ては唐末、宋、元にかけて南海貿易の立役者たりし回教徒も時代の推移に抗し得ず、舊態に停滯し、消極的な獨善的な生活を繰返し、異教徒から蔑視されてはゐるが北京は中國竝びに西北回教徒の文化の苗圃とも稱すべき地位にあるため彼等の動靜は敏感に邊疆に影響を及ぼすのである。卽ち北京回教徒の動向を看過出來ない所以である。

（筆者は滿鐵北支經濟調査所員）

馬仲英生存説に就て

野々村武雄

近頃、われわれの持つた大きなニュースの一つは、中亞横斷鐵道計畫の發表であつたが、これと前後してたまたま馬仲英の生存説が頻りに傳へられて來た。先づ、雜誌「大陸」（昭和十六年十一月號）が「赤色地區潛入記」に依つて生存説を紹介した。續いて北京、東亞新報も東京特電（十一月二十八日）として「夢ならぬこの偉大な計劃」の記事を掲げて、馬仲英の消息を述べ彼がカシユガルの地に在つて目下鋭意再擧を謀つて居る由を報じてゐる。

果して馬仲英は生きてゐるか。若し彼の生存が事實であるとすれば、それは今後の中國邊疆の動向に對して注目すべき事柄であり、延いては中亞横斷鐵道計劃にとつても等閑視することの出來ぬ問題となる。

馬仲英は劇的な經歷を持つ不思議な人物である。年少の時代から兵馬の内に人となり、その豪毅不屈な性質は、つとに炁司令（カースーリン）（小司令）の名を以て人から敬畏されて來た。一九三一年、例の小舖事件を發端として、トルキスタンの山野を縱横に馳驅し、彼の行くところ血と火が吹出さぬところとてはなかつた。それより後、勝敗の幾度かを經てやがて彼は東干の首領として神祕的な灰色の傳説を背負ふ人物として怖れられ「彼が沙漠の海を彷徨するオランダ人のやうに航海してゐる限り、トルキスタンには平和の日は來ない」とまで言はれるに至つた。

一九三四年、かの强暴慓悍な東干軍を叱咤して新疆一帶を阿修羅の如く席卷し、迪化陷落寸前にソヴェート軍の反擊に遭つて、あへなくも一敗地に塗れ、それ以後は杳として消息を絶ち、或は彼の波瀾重疊だつた生涯もその幕を閉したのではないかと推測されてゐた。その彼が八年に亙る雌伏を經過して、而も現在なほ健在で再起の意氣に燃えてゐると云ふことは、興味深いそして重大な事實である。

白面長身、見るからに慓悍な炁司令――大馬將軍の颯爽たる姿が再びトルキスタンの沙漠に現はれたとすれば、孰れまた彼によつて邊疆に風雲が捲き起されることを豫期するに十分なことである。

一九三四年、失踪後の馬仲英に關する消息なるものは、まことに諸説紛々としてゐる。卽ち、敗退後の彼は僅かな手兵を率ゐ血路を開いて靑海に逃れたとも傳へられ、或は喀什噶爾から和闐へ行つたとも言はれ、又英國の援助を得るために印度に赴いたとも噂されてゐる。

又一方、彼はその一黨と共に露領に遁入してモスコーに連行されたとも傳へられてゐる。兎に角、馬仲英の生死のほどは判然としてゐない。

然し、ヘディン博士の「大馬の敗走（ビッグホースフライト）」や、英國の「支那トルキスタンに於ける叛亂」等の比較的信賴される報告から判斷して、馬仲英は一九三四年以後既に露領に於て死亡したやうに思はれる。そしてこの死亡説が最も有力に信ぜられて今日に至つてゐるやうである。

さて、近來卒然として傳へられる馬仲英生存説は、それでは何を根據として流布され、それは如何ほどまでに信憑し得られるものであらうか。最近言はれてゐる生存説は、タタール族の血脈を引く人物をその曾祖父に持ち、自身も回敎を信奉してゐると云ふアメリカ人アハマツド・カマルの著書「笑ひなき國」（Land without Loughter）に基いてゐる。「大陸」の記事は「笑ひなき國」の抄譯であり、東亞新報特電記事もカマルの記述に據つてゐることは明らかである。卽ち、著者カマルが一九三六年、トルキスタン旅行の途次和闐に於て會見した回敎徒の一青年頭目 Ma Hsi Jung を馬仲英なりとするところに生存説の根據がある。そこで問題はこの Ma Hsi Jung が當の馬仲英であるか否かである。

筆者は、馬仲英の生存説が、この「笑ひなき國」に根據して Ma Hsi Jung 卽ち馬仲英なりとの斷定の上に稱へられてゐる限り、彼の生存説に荷擔することは出來ない。何故ならば「笑ひなき國」の記事中、既に Ma Hsi Jung が馬仲英に非ざることを推定指摘し得るからである。

先づ第一に、カマルは「笑ひなき國」（原書七四―五頁）に於て大要左の如く書いてゐる。

卽ち、甘肅の二青年が新疆の回敎徒叛亂軍應援のため、入新せること並に叛亂軍が二回に亙つて擊破され、三回

目にロシヤの飛行機のために全滅に近い敗北を喫したこと。更に二人の青年將軍の一人は、生命を救助されると云ふ約束の下にロシヤに行つたが强度の消化不良のために死亡した。その混亂の最中に Ma Hsi Jung なる當時二十二歳の甘粛の頭目が出現して、南疆（和闐）に於て大いに獨立の氣勢を擧げてゐる……云々と。本文中のロシヤで死亡した一人の青年將軍は馬仲英であり、他の一人は馬仲英の弟ではあるまいか。これは前記ヘディン博士の著書、或は「支那トルキスタンに於ける叛亂」の一文に徴しても推定される。

「支那の東北軍がカシユガルに到着した時、馬仲英は其の地のソ聯領事からロシヤに行くやうに勸告された。彼はエム・コンスタンティノフ書記官、ソ聯領事館の通商事務官數人に附添はれて國境のウルグチヤトへ行つた。その後、彼はモスコーに到着後死亡した」（「支那トルキスタンに於ける叛亂」）

これによつて、前記露領で死亡したと書いてゐる青年將軍の一人が馬仲英であらうと推定することは不自然でないやうに思ふ。かやう推定すると、混亂の最中に出現した Ma Hsi Jung を馬仲英と斷ずることは甚だ不合理なことである。

次にカマルはその著書の後段（原書三〇三頁）に於て

……Ma Hsi Jung と彼の同志 Ma (Chung Ying……云々と書いてゐる。この Ma Chung Ying こそ馬仲英と推定される。この一句を前記の判斷と照合して考へると、傳へられる馬仲英（Ma Hsi Jung）は正しく馬仲英（Ma Chung Ying）とは別人であること、これより明らかな證據はないであらう。

馬仲英

又、カマルによれば Ma Hsi Jung は當時（一九三六年）二十二歳とされてゐるが、馬仲英は少くとも二十五六歳でなければならぬと推定されるし、Ma Hsi Jung を馬仲英と讀ませることも無理なことに思はれる。これは寧ろ馬世（士）榮？ と當てるのが至當ではあるまいか。

大體以上の諸點から推測して今尚ほ和闐に於て再起に虎視眈々たる馬仲英は Ma Hsi Jung であつて、本物の馬仲英ではないやうに思はれる。從つてカマルの一書を執つて直に馬仲英の生存説を稱へるのは早計に失する判斷と云はなくてはならない。

然らば、馬仲英の生死はどうか。前にも記したやうに、彼は既に死亡せるもののやうに推測されてゐるのであるが、筆者にはその確證がないから判然とした斷定は下し得ない。

今でも一部回教徒は、彼は何處かに韜晦してゐて、一度機を得れば再び回教の救世主として「回教徒の新疆」建設のために奮起するのだと信仰されてゐる。それは恰もアラビヤ人がT・E・ロレンスが既にクラウヴ・ヒルの輪禍によつて死去せるに拘らずロレンスの再現を信じてゐるのと同樣である。ことによると「或る晴れた日、沙漠の眞只中に馬仲英が再び浮び上つて來る」かも知れない。この一つはトルキスタンの草原に一つは熱砂のアラビヤ沙漠に活躍したロレンスと馬仲英とは、その行動一脈相通じてゐるものがある。

馬仲英はトルキスタンのロレンスと言つてもよいであらう。ともあれ、中亞横斷鐵道計畫も進められてゐる際であるから大馬將軍の生死も一應分明にしたいものである。

尚、從來馬仲英は單に冷血强暴な盜賊の頭目と云ふ頗る憎惡に滿ちた言葉が浴せられてゐる。これは宗教的に仇敵相容れざる漢人の一方的な言ひ分である。又、ヘディン博士などもその探險の途中、戰火の中に捲き込まれ、馬仲英軍の迫害を受けたといふ好ましくない印象から馬仲英に對し平かならざる評言を放つて居ることは止むを得ないことである。然し、これらは孰れも憎惡か偏見に執らはれたもので、必ずしも公平な觀察ではないことを大馬將軍のために一言してこの稿を終ることとする。（筆者は中央亜細亜協會員）

鄭州開元寺の舍利塔

三好鹿雄

皇軍入城直後の鄭州に行つて、佛教史蹟に就て調べてみた。

出發前に見た『河南通志』に依ると鄭縣管內には、次の五ケ寺がある。

崇聖寺　在州北門外、宋熙寧間創建、明洪武十五年重修、置僧正司于其內、皇淸順治九年、康熙二十九年重修。

開元寺　在州治東、唐玄宗開元年創建、內有舍利塔一座。

白佛寺　在州城東二十里。

淸林寺　在州城正南四十里。

興國寺　在州城北二十里。

この中、後の三寺は何れも城外數十里の箇處に在るので、戰鬪中のことなれば、身の危險はこれを冒すとしても軍に及ぼす迷惑を考ふれば、到底參拜は出來まいが、北門外の崇聖寺と、州城內の開元寺とは訪ひ得るものと豫定してゐた。然るに、崇聖寺の方は、住民に訊いてみたり、又北門附近は數回往來したがどうしても判らなかつた。順治年間、康熙年間と、淸朝時代に二回も重修してゐるのだから無い筈はないと思ふのだが、繁忙なる業務の傍らでは遂ひに求め得なかつた。

開元寺の方は、すぐ判つた。ところが拜し度いと願つた境內の舍利塔が、數日前に倒壞したと云ふのである。

現場に行つてみると、何もない廣い空地に唯、堆高く煉瓦が盛り上つてゐるだけで、近寄ると下敷になつて犧牲となつた者の死骸がまだ收容されずにあるので、何とも云へない惡臭が鼻を突いた。

抑も開元寺といふのは、今から約一千二百年前、唐の玄宗皇帝が佛恩を感じて出家した時、天下に勅して各州府に建立せしめたもので、『佛祖統記』に『開元二十六年（皇紀一三九八年）勅して天下の諸郡に龍興、開元の二寺を建てしむ』とあるのがそれである。

當時果して諸州悉く實際に造寺が行はれたるや否やは疑問であるが、支那の各地を旅行してみると、到る所にこの寺のあるのを見るのである。更に六年後の天寶三年には、天下の諸州に勅して金銅天尊、佛像各一軀を鑄てこれを開元寺に安置せしめたといふ記錄が殘つてゐる。

鄭州の開元寺に就ては、前揭の『河南通志』が傳へる以外に何の記錄もないのであるが、現在は寺の建造物は悉く滅亡して、寺跡は土鹽や硝石礦を採取する鹽田と化してゐる。唯一つ、最近まで敵の小さい政治機關でもはいつてゐたらしい三部屋ばかりの小舍が一軒あつて、その裏に煉瓦造りの亭の如きものがあり、中に矢張り八角型の古い尊勝陀羅尼幢が保存されてゐる。

佛、菩薩、天人等の精細な彫刻が施してあつて中々立派なものだが、刻字は大部分磨滅してゐる。表面の『尊勝幢……』なる大文字の横に

伏以此尊勝經幢……

於寺中建立至天成三年……

等の文字が判讀出來る。天成は唐末五代、後唐の明宗の年號で、玄宗皇帝の時代から約二百年である。故にこの年號を有する經幢は、それより後のものである筈だから、恐らくは宋の初頃にでも建造されたものかと想像されるが寺院もこの頃修復され、舍利塔とも何か關係があるのぢやないかと考へられる。併し、證據の無いことゝて確言は出來ない。

倒壞前の塔の風貌には接した事がないが、十年程前の撮影に係る寫眞に依ると、八角十一層の塼塔で、各層に窓があり、風雨に曝されて相當原型が毀れてゐる。併しそれでも屹然として聳え立つ姿は鄭州の一偉觀だつたので、後述する樣に軍事上の障碍物とされた程である。而して、又その一偉觀たりし自らの勇姿が塔の運命を決定したのである。

徐州の敵四十萬を屠つた皇軍が、引續き潰走する敵を追擊して隴海線を驀然に西進、昭和十三年六月五日、遂に河南の要衝たる開封城頭に日章旗を揭げた。開封附近は平々坦々たる原野ばかりで、而も到る處に樹林が繁茂してゐて、全く見透しが利かぬので、この戰鬪に於て、我が軍は砲擊の觀測に頗る困難を感じた。その時、遙か樹間に頭を現したのは、城內の鐵塔である。我が砲は之を目標に火を吐き、遂に占領した。即ち皇軍は鐵塔に導かれて開封に入城したのである。

皇軍は開封占領の餘勢を以て、更に鄭州に迫るものと考へた敵は、民衆の疾苦も地方の衰頽も全く眼中になく、

第一書房戰時體制版　各七十八錢

土田杏村著　　初刷二萬部目下發賣中

人生論・宗敎論

日本文化の若き父であり偉大なる眞理の殉敎者てあつた土田杏村の全業中の二大傑作『人生論』と『宗敎論』を集めた名著!!その高遠なる理想と飽迄も現實生活に立脚せる明快な所論永遠に輝く!!

杏村が殘して行つた業蹟は驚くべき尨大さであるが特にその人生と宗敎についての獨自にして强烈な所論は今日なほ凡百の人生論と宗敎論の彼方に嶄たる高さをもつて聳立してゐる。その內容における透徹せる思索と廣大無邊の包容力及びその文章の美しさは追究の嚴しさを、よく表明してゐる點何人の追隨も許さない。

文學博士 後藤末雄著　增刷　六刷二萬部發賣中

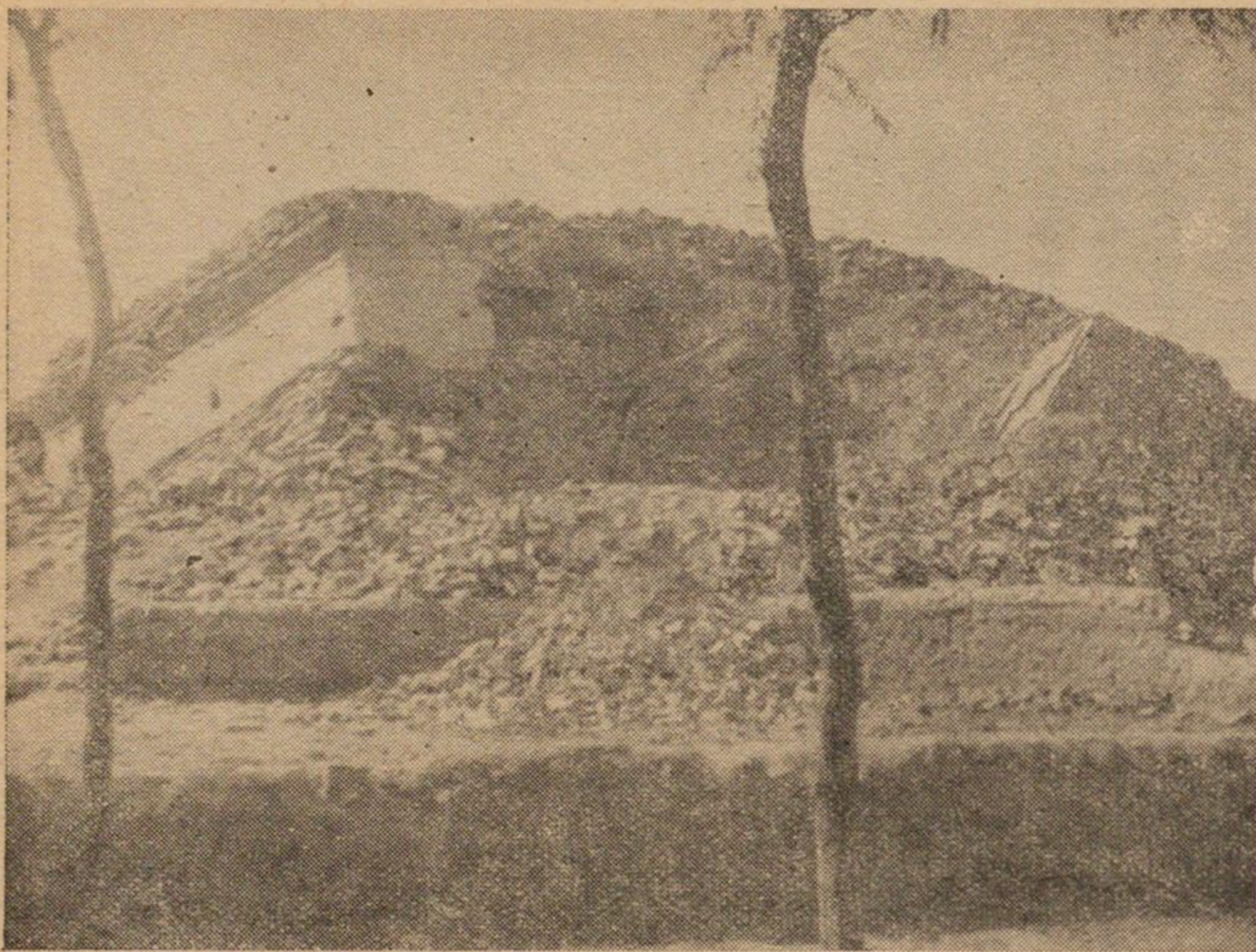
支那四千年史

日支文化の交流を基礎として古代より現代に及ぶ支那四千年の興亡變轉を敍述せる劃期的支那通史!!興味津々たる大文化史として好評湧ける名著!!増刷出來

ここでは、先づ支那の文化に中心が置かれ、次ぎに支那文化と他國文化との交渉が闡明せられてゐるが　特に日支文化の流通と比較に最大の重點が置かれてゐる。換言すれば、この書は日本史の各時代面と接觸する『支那四千年史』である。「支那を知ることによつて日本をよりよく知る」といふ著者の主張は、遺憾なく玆に實現せられてゐるこれこそ刻下の我々の渴望を醫する劃期的な支那史たることを疑はない。

東京麴町三番町
振替東京六四二二三

黄河を決潰し、鐵路を撤收して防禦に狂奔した。のみならず、鄭州の舍利塔が、開封攻擊の時に於ける鐵塔の如く又我が砲擊の目標となることを恐れてこれを破壞湮滅せんと計つた。

眞に人天共に許さざる暴擧と言はねばならぬ。即ち塔の基部に爆藥を裝置して爆破したが、如何にせん敗戰に次ぐ敗戰の後とて、爆藥不足して完全に目的を達せず、塔は中心から二つに裂けて、西半のみが崩壞し、その片割れは、危ない恰好で、今日まで殘つてゐた。

その殘つてゐた東半が十月三日遂に倒れて、鄭州の舍利塔は我我の眼界から永久に消え去つてしまつたのである。

倒壞した舍利塔

附近には防空壕なども造つてあり、市民が澤山集つてゐたが、三十餘の男女の生命は、打たれて塔と運命を共にした。

以上は倒れた塔を視察した時、集つて來た人々から聽き取つたところであるが、その集つた人人の中に、四歳位の男兒が混つてゐた。この男兒は母親に抱かれて、此の日塔の下に在つたが、倒壞した塔に埋もれて、家人は悉く死亡し、自分一人のみは母の慈愛に護られて助かり、その死骸の腕の下から煉瓦を押し除いて這ひ出して來たのだと云ふ。恐らくこれに類した幾多の哀話がこの堆高い煉瓦の下に眠つてゐることであらう。

背後に河南平原の豐富な資源を控へ外國人の投資する者も多く、京漢、隴海兩鐵路開通後は急激に發展して、清朝時代には僅か一州城に過ぎなかつた鄭州が、事變前の極點に在つては、人口實に十五萬を算したといふ。それが今では戰爭の慘害を被つて見る影もない有様と變つた。それも戰爭といふ一大事件の前には已を得まいが、尊い教訓を含む我等が祖先の遺蹟を破壞してしまふとは、それは餘りにも心なき人の行爲と云ふべきである。

我が占領地區內に於ける古蹟保存に對する努力と、各種建設の非常なる進捗と、それらを思ひ合せると、その對照の甚だしさに驚かざるを得ない。

一日も早く、全面和平の日來りて、支那の古蹟は我等の手で、研究もし調査もし、又保存の方法も講じたきものである。（筆者は開封駐在、佛教研究家）

禹門口の思ひ出

日比野丈夫

去る十月二十八日、山西省西部の新作戰によつて、黄河の重要渡河點たる禹門口は皇軍の手中に歸した。

禹門口は、汾水が黄河に流れ込む附近、河津縣城から十粁餘り北にあつて、ここでは黄河の西岸から絶壁が迫り、河幅は僅か二百米に過ぎない。

悠久の昔、夏の禹王が、氾濫した黄河の水を通すために切り開いたと傳へられる龍門が卽ちここである。

其處に禹王の廟がある。黄河の流れを溯のぼつて來た魚は、この急流渦卷く龍門の難所を容易に越すことが出來ず、漸くにして越したものは忽ち變じて龍に化したといふ。

支那の人は、これを登龍門と稱し、むつかしい科擧—高等文官試驗—の及第に喩へた。ここは古來山西省と陝西省とを結ぶ交通上の要地で、昔は龍門關と云ふ關所が置かれたこともあり、また、風光の絶佳な名勝地として文人墨客の訪れる者が迹を絶たなかつた。

私が河津縣を訪ねたのは一昨年の十二月、多の最中のことであつた。ここは、鐵道沿線から非常に離れてゐるので、運城から自動車路が通じてゐる。猗氏・臨晉の兩縣を經たのち、普通は榮河縣城によるのであるが、東北萬泉縣の縣城を通過して行く路もある。

運城、河津間約百二十粁の行程である。高原を越えて汾水の流域に近づくと、路は急に下りとなり、やがて眼下に河底の樣に低く汾水の盆地が横たはり、北側の丘陵に寄り添つて河津縣の城壁が小ぢんまりと築かれてゐるのが見える。その丘陵の上がまた坦々たる黄土の高原であつて、その高原の盡きるところに、縣の北境を限る山々がゆるやかに波打つてゐる。左手には黄河の流れが白く光り、北、山峽中に禹門口が望まれるのである。

當時はまだ禹門口は敵地區の中にあつて、容易に行けるところではなかつたので、我々は縣城の北口に連なる九龍崗の上から、これを遠望するだけで滿足しなければならなかつた。

此處は臥鱗岡とも鱗島とも云はれ、地隙によつて分れた九つの山の頂に、それぞれ九つの廟が立つてゐる。その一番西の禹王廟から、西北指顧の間に禹門口を望むことが出來るのである。若し晴天の日であれば、舟が往來するのも見えるさうである。黄河の北岸には長く沙丘が連なつてゐて、春ともなれば杏や李の花が見事だと云ふ。

頭を廻らせば、黄河が南して水烟の中に消ゆるあたり、汾水の流れ込むのがかすかに望まれる。しかし此の日は生憎、天が曇り風さへ加はつて、黄塵がいつもより烈しかつた。望遠鏡を以てしても、禹門口の眺めは殘念ながら思ふにまかせなかつた。

『やがて近いうちには、こちらのものにしてしまひますよ。さうして今度見えた時は何時でも行けるやうにしておきますよ』

と、元氣な聲で語つた部隊長の顏が目の前に浮ぶ。今や部隊長の得意思ふべしであらう。

縣城の西北一里餘り、東辛封村といふところに子夏の祠がある。子夏といへば孔子の門人中でも錚々たるもので最も文學の才があつたといはれる。

孔子は子夏と詩に就て問答を交したのち『予を起すものは商なり、始めてともに詩を言ふべきのみ』と云つてこれを激賞したことが論語に見える。

商とは子夏の名である。孔子の歿後子夏は魏の文侯といふ賢君に招かれてその師となり、西河といふ處で教授したと傳へられる。西河は、卽ちこの地方であるといふ。

子夏の姓は卜と云ふ。その子孫だと稱する卜印娃と云ふおやぢさんが出て來て案内をして與れた。それについて村はづれに出ると、其處に子夏の墓があり「先賢子夏之墓」とあつて、コンクリート造りの門があり、なかなか堂堂たるものであつた。

卜印娃さんの話に依ると、現在この村には卜を姓とする者が二軒あり、何れも百姓である。この親父さん寫眞をとつてやると、是非一枚送つて與れと賴んだ、子夏の子孫もハイカラになつたものだと感心した。

さて併し、良く考へてみると、子夏が此處に居つたと云ふことは、どうもをかしい。今から千五百年程前に作られた「水經注」といふ書物があるが、これは當時の河道の脈絡を記し、それに從つて沿岸の故蹟を述べたものである。それに依ると龍門から西南に當る

地方に幾ケ所かの石室があり、それが子夏の學問を教授した遺蹟だと傳へられ、附近にはまた子夏の廟もあるといふのである。しかし、これは河津縣地方のことをいつたものではなくて、黄河を隔てた對岸陝西省の韓城縣地方のことなのである。そこには今も子夏の廟があるらしい。

その他、種々の點から考へても、子夏の廟は韓城縣の方が古いので、河津縣のは後に作られたやうである。

今、河津縣の子夏の祠には元の至正十九年の碑が殘つてゐるが、或はこの祠はその頃に始めて作られたものかも知れない。それどころか、最近の研究によると、子夏が弟子に教授したといふ西河とはこの龍門附近のことではなくて、今の河南省彰德附近のことを云つたのだと云ふのである。この說は恐らく正しいであらう。すると、既に千五百年以來の云ひ傳へがある韓城縣の遺蹟も僞りとなり、況んや河津縣の遺蹟の如きは全く問題にならぬこととなる。子夏の墓やその子孫と稱するものも一體どうして出來たのか知れたものではない。支那ではこんなことも決して珍らしくはないのである。

東辛封から西へ行くと、西辛封といふ山村があり、そのはづれに、「漢太史公司馬遷故里」といふ碑が立つてゐる。驚いたことには、ここにも、司馬遷の子孫と稱する司馬姓のものが四軒も殘つてゐるさうである。その一人、司馬吉といふ人の家へ行つてみると、貧弱ながら太史公の遺牌も祭つてあつた。けれども更に驚いたことは、その司馬吉さん、全くの無筆で字が讀めない。司馬遷とはどんな人かも知らない風であつた。抑〻司馬遷とは、今を去る二千年の昔、漢の武帝の世に「史記」と云ふ立派な歷史の書物を作つた大學者である。彼は支那最初の大歷史家であつて、「東洋のヘロドツス」「支那の歷史の父」といはれる。

ああ、その子孫にして、眼に一丁字もないとは、司馬遷もさぞ地下で嘆いてゐるであらう。その墓は北方の康家莊にあると聞いたが行けなかつた。

しかし、此處もまた果してほんたうの司馬遷の故里なのであらうか？ なる程、彼は「史記」の中に、自叙傳を書いて、龍門の生れだと稱してゐる。

龍門は龍門でも、司馬遷は決して山西側の人ではない。彼は陝西省側の人であつて、今も、その墓はやはり韓城縣に殘つてゐる筈である。これは疑ふ餘地のない定說である。すると、この遺蹟もまた僞りなのであらう。

かうして、支那では有名な人の遺蹟傳說地が、到る處に作られてゆくのは珍らしいことではない。

我が國では、弘法大師の舊蹟が全國に擴まつてゐるが如くに、弘法大師の舊蹟といへば、最近は支那にもふえて來た。いつかも、北支の或る新聞に、大同のある小學生の模範作文として次のやうなのがあつた。

「弘法大師が大同の石佛へおいでになつて、日本に歸つてからそれにまねて奈良の大佛をお造りになつた。」

時代の順序から云つても、こんな無茶な話はない。誰が云ひ出した作り話であらうか？ 弘法大師は支那へは行かれたが大同に行かれた證據は絕對にない。また私が武漢地方へ行つた時にも漢陽郊外の歸源寺が弘法大師の留學された遺跡だといふので寺僧が「日本僧空海嘗到此所云々」と云つた字を書いて、それが日本人間に非常によく賣れてゐた。

これまた、弘法大師は絕對に武漢地方へは行かれなかつた筈である。

日本人の行くところ、お大師さまの舊蹟もどこまでもついて行くと云ふのも前述司馬遷の數多い遺蹟と考へ合せて面白い話である。

（筆者は東方文化研究所員）

今日の北支雜誌界
——華文雜誌展望——

清　水　久

事變發生直後、北支の雜誌出版活動は虛無狀態となつた。これに更生の鍬を入れたのは軍報道部、宣撫班等の宣傳工作としての文化活動であつた。

その後を受けて、一般の出版活動が徐々にではあつたが、非協調的色彩の濃い知識層の人々をも捲き込んで、躍動して行つた。近衞聲明の發表、汪精衞の蹶起、南京國民政府の誕生、と事態の推移と共に、それは加速度的に發展した。次々と、雜誌が誕生した。新らしい建設意識を懷いた青年が立ち上り、事變以來の殼を破り、知識人が次次に參加し、雜誌は質的にも向上線を辿りはじめた。正常な健康な出版文化の萠芽である。私は數年間、それを此の眼で見た。

現在北京で發行せられてゐる華文の雜誌は、機關會社等の刊行物、專門雜誌、宗教雜誌を含めて六十餘種にのぼつてゐる。しかし謂ゆる一般雜誌と目されてゐるものは、北支を通じ次の二十餘種であらう。

知識層、學生等を對象としては、中國公論、北華月刊、國民雜誌、國際新聞、中國文藝、反共戰線、東亞聯盟、吾友

一般の娛樂、趣味を狙つたものとしては、立言畫刊、三六九畫報、新民報半月刊、藝術與生活、全家福、沙漠畫報等があり、その他大型のグラフ雜誌として時事畫報、漫畫專門の北京漫畫があり、更に華北映畫、毎月科學はそれぞれ映畫、科學の大衆讀物を掲載してゐる。

婦人ものとしては婦女雜誌、新光、婦女新都會、子供ものとして新少年、兒童畫報がある。その他僑聲、中和等も見逃し難い出版物である。

その中、好評なものと、特質あるものに就て述べれば、

中國公論は先づ第一指を屈すべき綜合雜誌と云へよう。國際動態の分析、新秩序理念の追及、經濟問題の論文等に見るべきものがある。獨自の若い研究家グループを持つ編輯者の喩熙傑は自らを東亞理念の實現者として、最近新民會事務總長の重責を擔當した熱血人だ。

國民雜誌は大衆的綜合雜誌として誕生した。しかし、その內容は今日では相當高度の文化問題を取上げてをり一般文化人の注目を惹いてゐる。

吾友は、三日刊の小册ながら、學生層を對象として相當買はれてゐる。

娛樂ものは、一般に低級だとかえげつないとか云はれながらも、結構面白く、小記事も變化に富み、賣れ行きも多い。立言畫刊は良家の家庭人にも受け、三六九畫刊は花街に、沙漠はモダン人に喜ばれてゐる。

時事畫報、北京漫畫などは技術的にも內容にも改善の餘地はあらうが、北支によくぞこれ程のものが出版されてゐると褒めていいであらう。

婦女雜誌は最近めきめきと內容の質を向上して來た。中國文藝には飛躍的成長を將來に待望する。

北支の雜誌を通じて感ぜられることは、形式的にも內容的にも、編輯技術が立ち遲れてゐることである。何分にも事變以前からあまり活潑でなかつた北支の文化界であり、印刷設備や技術も不充分であつたといふ過去の不調な諸條件や消極的な遠慮がちな雜誌編輯者の過度の謙讓の美德や、それをさうあるべくした社會環境やらが、結局その立ち遲れの理由と考へられる。

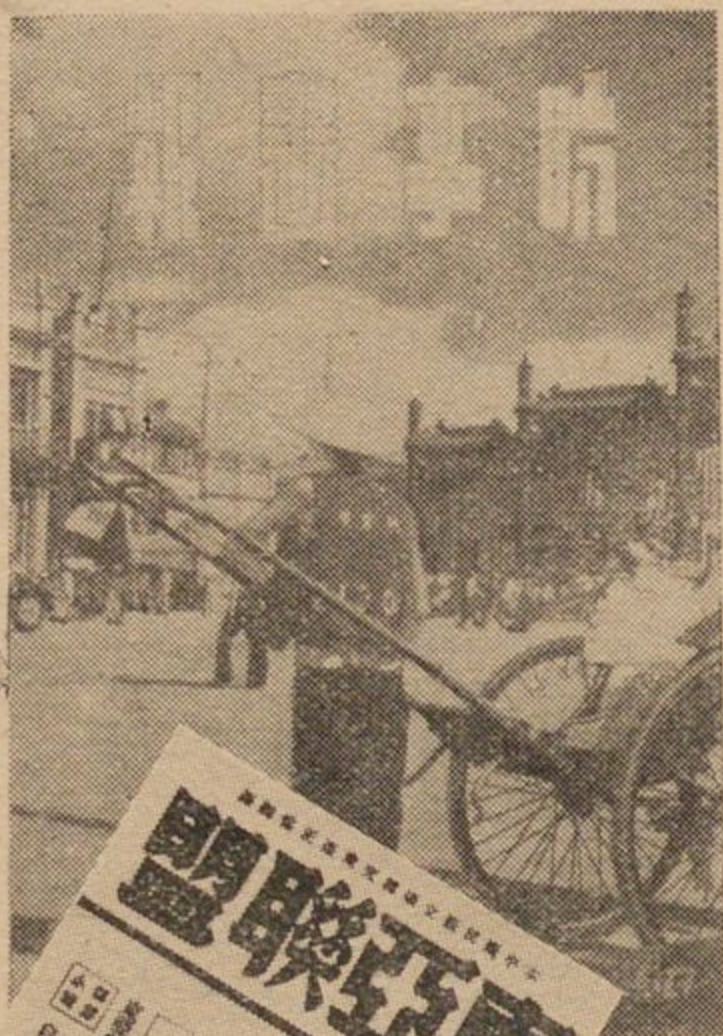
事變後一應印刷方面は、日本技術の進出と地元工場の復活充實で、日々進歩を示して來たし、之に卽應して若い人達の編輯形式上の研究も盛んになつて來てゐることは、毎月の雜誌の變化に見えて來てゐる。しかし、これが編輯の內容となると未だしの感があるのは止むを得ない。

編輯取材に就ては、いささかその貧困を痛感してゐる。第一、編輯に當つて、編輯計畫と云ふものが確信ある見通しを以て樹立されてゐないのではないかと思はれる節が多い。何の問題を誰に書かせるといふ目算が成り立たない。

これは執筆者として編輯者が白羽の矢を立てる人々が、質的にも量的にも不足なのである。知識人の雜誌進出が要望せらるる所以である。

第二に定期刊行物として、時の問題を取り上げることに修練が足りない。

第三に座談會とか、對談とか、訪問記とかの雜誌的新企畫がない。これは雜誌記者の訓練と、一般社會人がこれ

北支に於て刊行されてゐる華文雜誌の表紙

紙は、殆んど之を日本に仰がねばならない。今日、雜誌出版に使用してゐる用紙はみな友邦日本が生産してくれた尊い物資なのだ。北支の出版文化がこの日華物資の交流の基礎の上に立つてゐることは意義が深い。

に參加を拒まない空氣を作ることが必要である。

第四に文藝の不振、優秀作品の貧困である。

第五に雜誌ジャーナリズムに適應する文化藝術一般の連繫の不足である。

これ等の諸點は何れの雜誌を見ても感じられることだが、その何れもそれは缺點といふよりも未發育であることであつて、その未發育であることにまた力の入れがひがあり、將來が樂しいのである。

從來、一番安直に活用されたのは、英米雜誌記事の飜譯飜案をそつくり持つて來ることであつた。今でも、その風は各誌、特に娛樂誌に見られる。しかし、最近顯著な傾向は、これ等の材料を日本の雜誌に求めるのが目立つて來たことだ。國際情勢は此處にも反映して來てゐるのを知ることが出來る。

日華文化の交流と云ふことが、雜誌に於ては、用紙にしろ印刷技術にしろ編輯取材にしろ、具體的な現實に基いて進行しつつあることは見逃がしてはならないことであらう。遠くない以前に、或る一雜誌が日本を語り、日本的記事、東亞的言論を掲載し過ぎてゐる理由で讀者に受け容れられなかつたと云ふ事を聞いて暗い思ひをしたことが

あつた。讀者の選擇と雜誌の販賣量は如實に民衆の動向を示すものである。しかし、其の後色々な雜誌の內容や賣れゆきを見てゐて、それが必ずしも當つてゐないことを知つた。

既に三回に渡る治安强化運動の盛り上りや、擾亂を目指す英米の態度や、日華の關係の必然的結び付きが實際問題として隨所に存在する現實の中にあつて、北支の人心が消極的蟄居的態度から、協力的自發的なものに移行する樣子が執筆者の活動と讀者の動態の中に判然と見られるやうになつた。

日本に對する關心といふより、もつと大きな新らしい更生中國の生長の線に沿うての雜誌に對する接觸が活潑になつた。

耽美的なもの、悲劇的なもの、色情的なものと云つたやうな、人の精神が遮斷的な境遇に於て好まれるやうな記事や作品が退調を見せ、識字運動の提唱（國民雜誌）、如何に華北の文藝を復興するか（中國文藝）、學生生活に對する相談（吾友）、（結婚と家庭と育兒の問題（婦女雜誌）等の記事が登場し、新文化の烽火が見えてゐる。問題は更にそれに止まらず、北支に於ける政治的カンパニヤは、勿論その間軍報道部、政府情報局の强力な指導もあるが、各雜誌は一齊に之に協力態勢をとつてゐることは、北支の斯界が一元的指導統制の下にあつて、各雜誌も各〻の分野に於てこれに卽應してその東亞建設の上に果さるべき義務を盡しつつあるを看出される。特に今次の第三次治安强化運動には各誌の自發的形態でのそれが感じられる。

現時局下にあつて、東亞圈は凡ゆる部面が東亞的企畫と統制に組織化されつつある。北支の雜誌人は明確にこれを自覺してゐる。しかし、その中にあつても眞實の文化精神は死んではならない。雜誌人はそれを心配してゐる。

過日、久米、片岡、川端の諸作家と中國側文藝家の座談會の際、中國側から出された質問に對し『日本でも、當然あるべき統制は行はれてゐる。しかし文化的な人間精神としてよきものはどしどし發表されてゐる。同席の川端氏なども、異色ある作家だが、好い作品を次々出してゐる。戰時下にあつて日本はなほ六十％の文藝出版率を持つてゐる』との久米氏の說明は、その意味で中國側には深い感銘と歡喜をもつて受け容れられた。

各雜誌が、各分野に於ける獨自の取材を行ひながら一元的統制下に出版活動がなされてゐるといふことは、北支に於ける雜誌界の特性といつていい。この統制は編輯經營の面のみならず、配給の面に於ても行はれつつある。

北支に於て、この統制配給は、現在華北文化書局が擔つてゐる。一般雜誌の配給は、今日のところ從來の販賣網が現存し、統合といふ形にまでは到つてゐないが、それは早晩統一さるべき道にある。

華北文化書局は、北支最大の出版機關たる武德報社の出版雜誌五つの配給權を獲得し、これを基本として北支の刊行物全面の配給統一に力を入れてゐる。華北文化書局は、一昨年、南京政府宣傳部と折衝、北支中支間の新聞交換移入と統制配給の協定を成立せしめ更に昨年度に於ては、定期刊行物の交換移入、統制配給を斷行した。

曾つて北支の書店に氾濫した舊秩序孤島上海の雜誌は、今その姿を消しつつある。

華北文化書局は、最近更に滿洲國書籍配給會社との間に協定を結んだ。北支と滿洲國との文化交流の魁である。

北支の雜誌界は、宣傳報道の時期を經て、今や東亞的文化樹立の段階に步み出したわけである。これを育成する者は北支の文化人の人間精神の發揚にあらねばならぬと信ずる次第である。

可園雜記

加藤新吉

何はさて措き、對米英宣戰布告、その初頭に於ける赫々たる戰果は、近來最大の感激である。開戰以來ここに十二日、北支在留日本人の顏は悉く輝いてゐる。心が彈んで手の舞ひ足の踏むところを知らぬ有樣である。と同時に生活の緊縮、消費の節約があらゆる邦人の家庭に於いて更めて强調されて居る。可園の隣組に於いても國債購入とか獻金とか、ささやかながら奉公の誠を致すべき方法に就いて、話が進められて居る。

八日、開戰の朝、少し早目に出勤するに當つて、私は厨子に「大戰爭が始まつたぞ」と珍らしくにこにこしてみせた。勿論、彼には何の事やら判らなかつたらしく、無表情な顏をしてゐたのであるが、午後になつて「老爺がにこにこした譯がわかつた」と家人に告げたさうである。尤も其時には我々はまだ赫々たる戰果に就いて知る所がなかつたのであるから、にこにこの意味が、どの程度に判つたか、頗る疑問である。小報といふ四分の一頁大の大衆新聞を讀んでゐる彼は、今日では一應の經過を知つてゐるが、日本の勝利を信じてゐるかどうかはまだ判らない。

北京の支那人、特に有識と稱せられ又は自ら有識を以て任じてゐる連中は容易に日本の報道を信じない。特に初頭の戰果が餘りに大きいので却つて信じられないらしい。由來彼等は英米を偉大なりとし、日本より遙に强しと思ひ込んでゐる。支那事變前、靑島港に於て日本軍艦を見學した廿九軍の將校連が、大いにびつくりしながら「日本の軍艦がこれ位だから米國のはもつと大きいぞ」と囁き合つた話である。かういふ連中に、日本の最後の勝利が信ぜられないのは當然であるが、かく思ひ込ませたに就いては、日本人にも責任がないことはない。

私の知人の一人は、外交部長王正廷の口から「日本との面倒な交渉は英米大使を煩はすに限る」といふ話を直接聞いた。天津や上海の日本租界は英米のそれに比して極度に貧弱である。英米の文化施設は日本のそれに較べて格段に優れて見える。北京ロックフェラー醫院の偉容は同仁醫院と露骨な對照をなす。形のみならず遣り方もひどく違ふのである。事變後北京に住む日本人が、家屋拂底で仕方なく小さな家に住むと、大きい家に住む力がないからだと支那人は解するのである。私の知人が支那官僚の家族と共に自動車に乘つて、それを可園の門にとめた。すると官僚の太々はどうしてもここは違ふと頑張る。「日本人がこんな門のある家に住む筈がない」それが彼女の主張であり、實にはつきりさう言つたといふのである。彼等の對日理解、評價、認識は凡そこんなものである。

此頃、私は滿洲から持越した毛皮―と云つても實用品のカラクゥルの外套をきてゐる。が、それにも拘らず、車夫共は大いに敬意を表して、決して賃銀の前交涉をしない。行先を告げると默つて走り出す。普通の外套だと縱令それが上等でも賃銀をきめなければ乘せない。毛皮がものをいふのである。事大思想の支那人には、地圖の上で、支那でやつてゐる事で、偉らさうに見える米國が尊敬されるのである。だが斯うした支那人の事大思想、特に日本及び日本人に對する認識が改められる日もさう遠くはないであらう。

支那關係圖書紹介 (5)

文化關係

中國文化關係の書物は、近來相當に刊行され、飜譯もの、研究書など非常に多い。いまこれらのもののなかから一般的なものを拾つて見るとまづ「**日支文化の交流**」がある。文學博士辻善之助著、創元社版で、日本上代から、康熙乾隆に至るまでの日支文化の交流について年代順に解說してある。「**西洋文化の支那への影響**」は張星烺著、實藤惠秀譯、日本青年外交協會版で、歐洲の物質思想文明の、支那への道を大づかみに理解するには便利である。「**支那文化と支那學の起源**」後藤末雄博士の著、第一書房から出版されてゐる。これは、「支那思想のフランス西漸」といふ題で書かれた氏の博士論文を出版したもの。東亞の地に新らしき地を求めんとする異種異文の西洋人が行つた支那思想や、文物制度に對する研究と批判とを蒐めたもので、主として耶蘇教の宣教師が本國に書き送つた書簡集をもととしてゐる。

林語堂著「**我國土、我國民**」（新居格譯）は、豐文書院の出版であるが、中國人である著者は客觀的に中國現代文化と生活を解說してゐる點、異色がある。このほか、A・H・スミス著、白徹譯の「**支那的性格**」は、支那人の性格や、その民族性をよく觀察してゐる。このほか、創元社「**アジア問題講座**」全十二卷、うち七、八卷（民族、歷史篇）九卷（社會、習俗篇）十、十一卷（思想、文化篇）。これらは殊に九卷以後は中國文化に論及したもの多く、文化一般を概觀するによい。

支那の教育關係の書では、任時先著山崎達夫記「**支那の教育史**」（上下二卷）が、支那文化叢書のなかに含まれてゐる。このほか陳青之著、柳澤三郎譯「**近代支那教育史**」が生活社から出てゐて、原始民族社會時代から事變前までの教育に就いて詳述してゐる。支那事變後のものでは、興亞院華北連絡部から出てゐるパンフレット「**華北文教の現況**」があり、三省堂出版、關口泰著「**興亞教育論**」も、新中國の教育に觸れてゐる。

文化工作に就ては、宇田尚著「**對支文化工作草案**」（改造社版）なる快著があり、文化工作全般について、原理的基本的問題を繼續に論じてゐる指導的な著書である。

民族關係では、高田保馬博士の「**東亞民族論**」が改造社から出てをり、高田博士にはさきに「**民族の問題**」といふ著書があり、これは東亞協同體論とその方向を同じくするが、この民族主義論では、それを更に理論的基礎づけをしようとした。民族問題に關しては尾崎秀實氏の「**東亞民族結合と外國勢力**」（滿鐵弘報課編、中央公論社出版）東亞新書、また中華民族については蔡元培主編、伊東憲譯註の「**我が民族**」が、秋豐園出版部から出てゐる。これは、極、大ざつぱに中國を形成してゐる民族とその文化を概觀したものである。文化方面では「**支那近代文化史**」陳登原著、菅茂譯（人文閣）がある。

宗教關係

宗教方面のものも隨分多い。「**支那基督教史**」（生活社刊、比屋根安定著）があり、回教關係のものでは「**回教事情**」一卷—四卷（外務省調査「**西部北支那の回教徒**」（滿洲事情案內所刊）、金吉堂「**支那回教史**」（外務省調査部譯）、「**回々**」（小林元著、博文館刊）等があり、何れも中國回教を取扱つたものが多く「**華北宗教年鑑**」（興亞宗教協會編）（華文）は、興亞院華北連絡部文化局から出てゐる資料であるが、更にこのほか宗教關係の資料としては、興亞宗教協會（興亞院連絡部內）から刊行の「**興亞宗教叢書**」がある。この第一輯、北支那に於ける第三國系基督教團體の現況。第二輯、北支那に於ける古蹟古物の概況。第三輯、北支那に於ける天主教の概觀。第四輯道教の實態。第五輯、儒教の實態。第六輯、世界紅卍字會道院の實態。第七輯、北支那に於ける第三國系基督教の實態。第八輯、河北省山東省に於ける重要古蹟の八册が既刊となつてゐる。

昭和十七年一月十五日印刷納本
昭和十七年二月一日發行

二月號（每月一回一日發行）

會員登錄番號 一一六五〇八番

編輯者 北京・華北交通株式會社資業局 加藤新吉
發行者 東京市麴町區三番町一 長谷川巳之吉
印刷者 小石川區久堅町一〇八 共同印刷株式會社 大橋松雄
發行所 東京市麴町區三番町一 第一書房 振替東京六四二二三番 電話九段(33)三一四一・三三四一五番

一册定價㊁三十錢（郵送料一錢五厘）
一ヶ年分 金三圓六十錢

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社
廣告取扱 一手取扱所 大阪市西區京町堀上通一丁目二五 一新社 電話土佐堀九三九

体力強化に

ポリタミン

ポリタミンは牛乳蛋白を豫め人工的に消化したアミノ酸を主成分としこれにビタミンBを配したものです。從つて本劑は消化の煩ひなく、のむだけ吸收されて榮養となり、体重を増します

その上アミノ酸には体細胞を賦活して新陳代謝をよくし、食慾をすゝめ、抵抗力を増強する獨特の作用がありますから、相俟つて身体を丈夫にします。

榮養不良、食慾不振、虚弱小兒、胃腸衰弱、産前・産後、精力減退、手術後の人等の榮養補給と強壮料に好適す。

小瓶　中瓶　大瓶

各地藥店にあり

POLYTAMIN

一手販賣元 大阪市道修町 株式會社武田長兵衞商店

製造發賣元 大阪市堀上通 武田榮養化學株式會社

昭和十四年七月四日第三種郵便物認可 昭和十七年一月十五日印刷納本 昭和十七年二月一日發行（毎月一回一日發行）第三十三號

北支 定價 三十錢